

み 御 坂 中 丸 遺 跡

—山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書—

御 坂 中 丸 遺 跡

二〇一一・三

2011.3

山梨県教育委員会
独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構

み 御 坂 中 丸 遺 跡

—山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書—

2011.3

山梨県教育委員会
独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構

御坂中丸遺跡のあらまし



御坂中丸遺跡は笛吹市御坂町上黒駒地区にあります。今回の調査では、遺跡の西側部分が調査の対象となり、平成21・22年度の2回にわたりて調査が行われ、多くの土坑が検出されました。遺物は、県内でも珍しい縄文時代早期の土器片が出土しました。なお、大正6年に日本考古学史上有名な「黒駒の土偶」が発見され、現在、東京国立博物館に収蔵されています。

また、金川を挟んで1.5kmほど離れた距離にある縄文時代中期を中心とした桂野遺跡からは、中期中葉井戸式土器や中期後半曾利式土器のほか、土偶や人面把手なども発見されています。

第一次調査



平成21年度に実施された第一次調査は、約2,000m²が対象範囲となりました。調査の結果、縄文時代の多くの土坑や土器類が発見されました。



直径約1mの大きさで、扁平な自然石が2石並べて置かれています。葬送や信仰を想定させるものです。



上側で「朝顔形」に開いていく形状をしており、深く底部も確認できなかったことから、土坑というより中近世以降の井戸跡と考えられます。



縄文時代早期の土器片が多く見つかりました。この土器は、富士吉田市古屋敷遺跡より出土した早期第Ⅱ群土器と呼ばれるものに類似しています。県内では、笛吹市境川町机遺跡・寺平遺跡に同じ土器を見ることができます。



第二次調査



V区遠景（東から）



V区の調査風景



平成22年度に実施された第二次調査は、約350m²が対象範囲となりました。調査の結果、東側の谷に堆積した黒色土中から、縄文時代の集石土坑2基や土器・石器が発見されました。

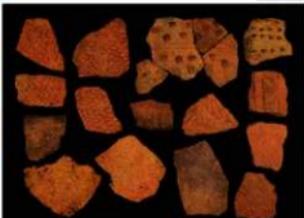
土坑の中にたくさんの焼けた石が充填されていました。底には平らな石が敷いてあり、炭化材も残っていました。蒸焼きや石焼きなどの調理を行った場所と考えられます。



縄文時代早期の土器



2号集石土坑



第一次調査と同様に、縄文時代早期の土器片が多く見つかりました。

序 文

本書は、山梨リニア実験線建設に伴う御坂中丸遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

「中丸遺跡」という遺跡は県下5ヶ所もあり、混乱を防ぐため「御坂中丸遺跡」としたことをお断りしております。

御坂中丸遺跡は、笛吹市御坂町上黒駒地区にあり、今回の調査地点より東側に向かって広がりをみせている遺跡です。この遺跡は、大正6年に縄文時代中期の三ツ指をした奇異な土偶（黒駒の土偶）が発見された遺跡として古くから人々に周知されております。

今回の発掘調査は、平成21年6月から11月と平成22年12月の二箇年度に渡る期間を要し、その間の基礎的整理作業と、その後の本格的整理作業を経て本書の刊行に至りました。

調査の結果、多数の土坑やピットが確認されました。また、遺物は縄文時代の土器片が検出されております。中でも、特筆されるものとして縄文時代早期の富士吉田市古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器があげられます。この土器の形は、砲弾型を呈する、いわゆる尖底深鉢型土器で、早期後半の野島式に併行し山梨県から長野県諏訪方面に似た形態がみられる地域的独自性の強い土器群として位置付けがなされています。県内での出土は笛吹市境川町の机遺跡や寺平遺跡に類例をみることができます。

今回の調査によって、以上のような成果が得られたことは、御坂中丸遺跡のある金川上流域での遺跡分布や縄文時代早期資料の追加など欠くことのできない歴史データとなることは間違いないものでしょう。

末筆ではありますが種々のご協力ご助言を賜りました関係機関各位および関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成23年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所 長 小 野 正 文

例 言

- 1 本書は山梨県笛吹市御坂町上黒駒地内に所在する御坂中丸遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構から山梨県教育委員会が委託を受け山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施したものである。
- 3 発掘調査期間および整理作業期間は以下のとおりである。

【第一次調査】	発掘調査	平成21年6月10日～9月7日
	基礎的・本格的整理作業	平成21年12月1日～平成22年3月28日
【第二次調査】	発掘調査	平成22年12月1日～12月27日
	基礎的・本格的整理作業	平成23年1月6日～3月25日
- 4 本書の執筆・編集は山梨県埋蔵文化財センターの吉岡弘樹・小林健二・皆川賢司・小林万里子が担当した。第4章付編1AMS年代測定・炭化材同定については、(株) 加速器分析研究所に委託した。また第4章付編2植物圧痕同定については、山梨県立博物館 中山誠二氏にお願いした。
- 5 遺構写真・調査風景写真は吉岡・小林(健)・皆川・小林(万)が撮影した。
- 6 報告書掲載遺物写真は吉岡・小林(健)が撮影した。
- 7 発掘調査における世界測地系座標測量・グリッド杭設定・標高杭設定については株式会社昭和測量に委託した。
- 8 V区の鳥瞰写真等航空写真については(株) 東京航業研究所に委託した。
- 9 発掘調査および整理作業においては次の方々・機関にご協力・ご教示を賜った。記して感謝の意を表す次第である。

独立行政法人鉄道建設運輸施設整備支援機構・錢高/アイサワ/北野共同企業体・財團法人堀内浩庵会フジヤマミュージアム・富士急行株式会社・笛吹市教育委員会・笛吹市御坂町坂野区・御坂リニア対策協会・株式会社昭和測量・有限会社手塚建材興業・株式会社奥石運送土木
宮澤健一(財團法人堀内浩庵会フジヤマミュージアム)
塚越剛(富士急行株式会社不動産事業部)
小潤忠秋・伊藤修二・内田裕一・野崎進・瀬田正明・望月和幸・大木丈夫(笛吹市教育委員会)
- 10 本遺跡に関わる出土品および記録図面・写真類などは一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 11 遺跡名については、笛吹市境川町に本遺跡と同名の「中丸遺跡」があり、双方ともに山梨リニア実験線建設に伴って発掘調査が実施されたことから、混乱を招く可能性も大きいと考え、本遺跡の名称は「御坂中丸遺跡」として、差別化を図った。

凡 例

- 1 本報告書の挿図等に関する指示は下記のとおりである。なお、主要遺構・遺物の挿図縮尺は基本的に次に示すとおりであるが、資料の大きさなどにより適宜、変化を持たせてある。また、ドットマークなどその他の指示については、図中に示してある。

遺構	全体図・遺構配置図: 1/200	土坑・ピット: 1/40
	集石土坑: 1/20	
遺物	土器類および拓影: 1/2 1/3	石器類: 1/1 1/2 1/3
	土製品類: 1/2	金属製品: 1/2

目 次

序文
御坂中丸遺跡のあらまし
例言・凡例
目次

第1章 調査の経緯と組織	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 山梨リニア実験線の概要	2
第2章 遺跡の概観	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 平成21年度調査の概要	6
第1節 調査の方法と基本層序	6
第2節 発見された遺構と遺物	8
第3節 まとめ	17
第4章 平成22年度調査の概要	44
第1節 調査の方法と基本層序	44
第2節 発見された遺構と遺物	44
第4節 まとめ	45
付編1	57
付編2	59
写真図版	61

挿図目次

第1図 遺跡位置図	5
第2図 調査区画図	7
第一次調査	
第3図 基本層序観察地点	18
第4図 基本層序柱状図	18
第5図 I区土坑・ビット配置図	19
第6図 II区土坑・ビット配置図	20
第7図 第1～4号土坑平・断面図	21
第8図 第5～13号土坑平面図	22
第9図 第5～13号土坑断面図	23
第10図 第14～22号土坑平面図	24
第11図 第14～22号土坑断面図	25
第12図 第23号土坑平・断面図	26
第13図 第24～27号土坑平・断面図	27
第14図 第27～29・62・63号土坑平・断面図	28
第15図 第30～34・64～71号土坑平面図	29
第16図 第30～34・64～71号土坑断面図	30
第17図 第35～46号土坑・第31号ビット平面図	31
第18図 第35～46号土坑・第31号ビット断面図	32
第19図 第47～51・61号土坑・第27号ビット平・断面図	33
第20図 第52～60号土坑・第43号ビット平面図	34
第21図 第52～60号土坑・第43号ビット断面図	35
第22図 遺物実測図（1）	36
第23図 遺物実測図（2）	37
第23図 遺物実測図（3）	38
第24図 石器実測図	38
第二次調査	
第25図 V区全体図・土層図	50
第26図 V区出土遺物分布図	51
第27図 V区第1・2号集石土坑平・断面図	52
第28図 V区出土土器実測図（1）	53
第29図 V区出土土器実測図（2）	54
第30図 V区出土土器実測図（3）	55
第31図 V区出土土器実測図（4）・石器実測図	56

第1章 調査の経緯と組織

第1節 調査に至る経緯

リニア実験線は昭和52年に宮崎県に本格的設備が開設され、平成9年から技術開発を山梨へ移し、先行区間18.4kmで車両開発や電力供給装置や列車のコントロール装置、完全管理システム等の開発実験を行ってきた。平成19年1月、JR東海の山梨実験線建設計画などを国土交通大臣が承認したことから、一般区間の工事が平成25年度完成を目指して行われている。その距離は先行区間も含め総延長42.8kmに延伸となり、これを受けて試掘・確認調査が行われ、本線部分や仮設道路建設地にある周知の埋蔵文化財の発掘調査が実施されることとなった。

今回の発掘調査対象地は、御坂山地に源流を持ち急峻に笛吹川に下る金川の右岸にある山腹のなだらかな西向きの斜面（遺跡西端部標高約590m）に位置しており、金川を挟んで大崩山が遺跡地を凝視している。当地のやや甲府盆地方向にやや下った地域には桂野遺跡などの縄文時代遺跡が点在している。そして当該地は、「黒駒の土偶」の名称で知られる奇異な表情の三本指を持つ土偶が大正6年に発見された遺跡として古くから知られている「中丸遺跡」の範囲内にあたり、埋蔵文化財保護措置が必要となるため、平成19年度に実施された試掘調査結果などに基づいた協議の結果、事前の発掘調査を行うこととなった。その後、学術文化財課と独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部との間で複数の協議が実施され、予算積算作業などがなされ山梨県埋蔵文化財センターによって、平成21年度に発掘調査および基礎的・本格的整理作業を実施し、平成22年度に報告書を刊行することになった。さらに、平成21年4月27日に現地協議を行った後、平成21年6月10日から9月7日まで発掘調査を実施することが決定された。また、平成21年12月1日から平成22年3月28日まで基礎的・本格的整理作業を実施した。一方、平成22年度には工事用道路建設に伴う調査が計画され、4月9日、11月5日の現地協議を経て、第二次調査として平成22年12月1日から27日まで発掘調査を行い、翌平成23年1月6日から3月25日まで基礎的・本格的整理作業を実施し、第一次調査と併せて本書を作成した。

なお、法的な手続きは以下に示す。

【第一次調査】

平成21年6月10日

文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を山梨県教育委員会教育長に提出

平成21年9月11日

文化財保護法第100条第2項の規定により埋蔵文化財発見の通知を笛吹警察署長に通知する。

【第二次調査】

平成22年12月1日

文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を山梨県教育委員会教育長に提出

平成23年1月6日

文化財保護法第100条第2項の規定により埋蔵文化財発見の通知を笛吹警察署長に通知する。

第2節 調査の組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当

【第一次調査】

発掘調査／基礎的・本格的整理作業

主査・文化財主事 吉岡弘樹

主査・文化財主事 菅川賢司

発掘作業員（短期間非常勤嘱託職員）

発掘調査・重機運転・土砂運搬

村田勝利

発掘調査

石田洋一・伊藤知子・今津武男・大森ふじの・岡部豊雄・小澤正臣・北野礼子・五味謙・齋藤里美・坂口正・佐々木富士子・中沢保・長澤菊男・花輪賢一・原田隆邦・原田みゆき・深山邦夫・松原静夫・望月幸次・望月太喜雄・望月敏子

基礎的・本格的整理作業

梶原初美・平川涼子

【第二次調査】

発掘調査／基礎的・本格的整理作業

主査・文化財主事 小林健二

副主査・文化財主事 小林万里子

発掘作業員（臨時職員・短期間非常勤嘱託職員）

発掘調査

浅川悠起子・雨宮久美子・出月正敏・大島功一・小松一吉・野呂瀬英臣・平賀正起・深沢茂子

基礎的・本格的整理作業

土井みさほ

第3節 山梨リニア実験線の概要

1962年（昭和37年）から始まった国鉄（現JR）によるリニアモーターカーの開発は、10年後の1972年（昭和47年）に、200mの実験線で実験車がはじめて浮上走行に成功した。

1977年（昭和52年）には、宮崎県に本格的な実験線が開設され、ここでの実験により、1979年（昭和54年）、無人走行の最高速度517km/hの記録が樹立された。21世紀の鉄道として脚光をあびるリニアモーターカーは、1997年（平成9年）から技術開発の場を山梨県都留市へ移し、車両開発のほか、電力供給装置や車両のコントロール装置、完全管理システム等の開発を行っている。山梨リニア実験線での成果として、2003年（平成15年）には、有人走行による581km/hを記録し、2005年（平成17年）3月には、国土交通省の超電導磁気浮上式鉄道実用技術評価委員会から「技術開発は大きく前進し、超電導磁気浮上式鉄道について実用化の基盤技術が確立したと判断できる」と評価された。

2007年（平成19年）1月、JR東海の山梨実験線建設計画などを国土交通大臣が承認し、一般区間24.4kmの延長工事が2013年度（平成25年度）完成をめざし行われている。それにより、実験線を428kmに延伸し、設備も実用仕様に変更するとともに長大編成車両によるトップスピードでの長距離走行や長大トンネルの走り抜けなどの技術的テーマへの対応や保守体系の確立など、超電導リニアの実用化に向けた確認試験を行うことが計画されている。

第2章 地理的歴史的環境

第1節 地理的環境

御坂中丸遺跡のある笛吹市は2004年10月12日に東八代郡石和町、御坂町、一宮町、八代町、境川村及び東山梨郡春日居町が合併して発足した市である。その後、2006年8月1日に東八代郡芦川村を編入して現在に至っている。笛吹市は甲府盆地の中央部やや東寄りに位置しており、東は甲州市及び大月市に、西は甲府市、北は山梨市、南は富士河口湖町と接している。

本遺跡が所在する旧御坂町は笛吹市の南西部にある。東西約16km、南北約4kmで、面積は約64km²の大きさである。また、山梨県を国中地方と郡内地方に分断する御坂山塊の北西斜面に立地し八町峰に源を発する金川と、神有東方三ツ沢より発する天川などによって複合扇状地を形成している。金川扇状地は、甲府盆地の陥没によってできた断層崖下に、金川が運んできた土砂が堆積してきたもので、盆地東南縁の扇状地のうちで最も規模の大きいものである。一方、天川扇状地は山麓に近い部分を旧御坂町が占めており、傾斜は金川扇状地より急峻である。旧御坂町の地質は、山地の大部分は花崗岩類及び御坂層からなり、一部に小仏層、泥岩層、ローム層が見られる。また、平地はその上方の岩層の碎屑物からなっている。

また、当地の土地の約70%を山林が占めている。排水が良好で地層が深いという扇状地の特質から、広く桑が栽培され、明治以降の養蚕の振興につながっている。また、昭和30年代以降は養蚕に代わり、モモやブドウの果樹経営が盛んとなり、現在は耕地の69%が果樹地帯へと農業形態を変容させた。

人口約13000人の多くは二之宮や成田などの石和町に近い御坂町の南東部に集中する傾向をみせている。町内には国道20号・137号が通じ、中央自動車道の一宮御坂インターチェンジが近い。

御坂町の古道について簡単に振り返ると、金川の谷に沿って上り、御坂峠を越え、河口に出て龍坂峠を過ぎる御坂道があげられる。御坂道は古来重要な交通路であり、それと相まって、御坂町は古代における甲斐国の政治、文化の中心地であったことが窺われる。

第2節 歴史的環境

御坂中丸遺跡（1）周辺の縄文時代の遺跡として、三光遺跡（2）・花鳥山遺跡（3）・桂野遺跡（4）・諏訪の原遺跡（5）・豆塚遺跡（6）・积迦堂遺跡群（7）などがあげられよう。

山梨県の縄文時代遺跡の集中する地域として、甲府盆地縁辺部と八ヶ岳山麓、桂川流域の3地域に大きく分けることができる。御坂中丸遺跡は、3地域の一つである甲府盆地縁辺部の、曾根丘陵から盆地東部の扇状地上に集中して存在した遺跡群の一つだと考えられる。

三光遺跡（2）は、中丸遺跡から西へ5kmほど離れた浅川の形成した扇状地の扇頂部付近にあたる標高427m付近に所在する。昭和49年から50年にかけて発掘調査され、縄文時代中期中葉～後葉の堅穴状遺構、集石遺構、土坑、縄文時代後期前葉～後葉に属する土坑および配石遺構などが発見されている。遺構の中でも多数を占めるのは土坑であり、出土した遺物のあり方などから土坑墓的な性格を伺い知ることができる。この中でも、色濃い特色としてあげられるものとして、大形の底部穿孔土器や深鉢形土器の大破片が折り重なって出土した例が特筆される。さらに、縄文時代晩期の土偶や土器も出土している。また、縄文時代中期後葉の土器片と一緒に硬玉製大珠が検出され、当時の人々を驚かせている。

縄文時代前期の遺跡として著名な花鳥山遺跡（3）は、中丸遺跡より西に4kmほど離れた御坂山塊から甲府盆地に向かって北西方向に舌状に張り出した丘陵上の標高500m付近にある。ここでは、約5000年前の集落の跡が検出されている。特に昭和62年に行われた、山梨県教育委員会の調査では、対象面積810m²の中で24軒の住居跡が検出されると共に、極めて大量の土器が出土している。これらの土器の主体は前期後半の諸磁式土器であるが、早期中葉の押型文土器や早期末～前期初頭の含織維土器も出土している。また、わずかに中期・後期の土器も見つかって

おり長期間に渡り当地に人々が生活していた様子が伺われる。石器類では狩猟の象徴的道具である石鏃が多数見つかっている。一方で、植物採取活動（または栽培）に係わる象徴的な道具である打製石斧、石皿、磨石、凹石も多数検出されており、本遺跡において、採集・栽培活動が盛んに行われていたことが想定でき、これらを裏付けるようにドングリ・クリ・クルミの堅果類や球根類、栽培食物のエゴマなどが検出されている。

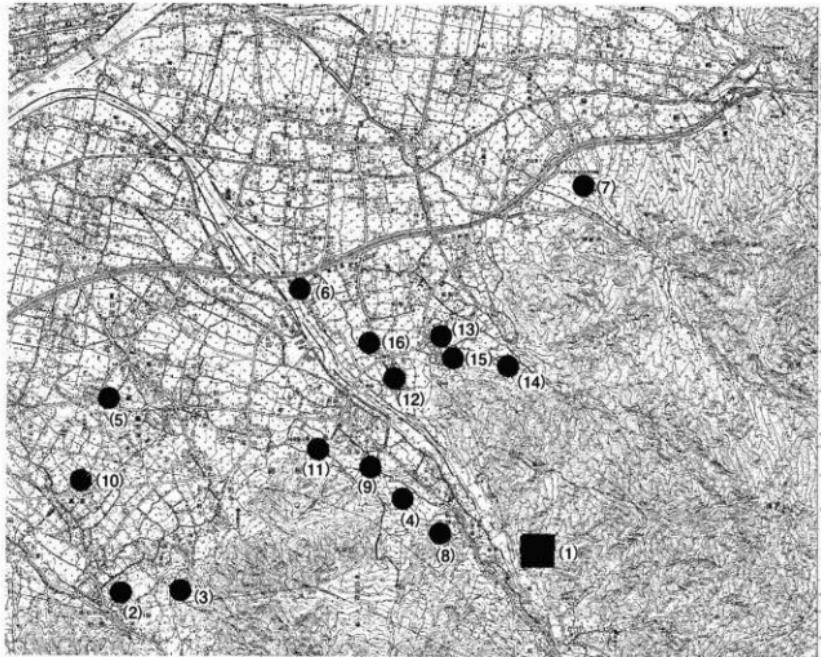
桂野遺跡（4）は金川の左岸にあり、御坂中丸遺跡とは金川を挟んで1.5kmほど離れた距離にある。標高約500mの金川の扇状地上に占地している縄文時代中期を主体とした遺跡である。縄文時代中期中葉戸戸式土器や中期後半曾利式土器のはか、土偶や人面把手なども検出されている。

諏訪の原遺跡（5）は御坂中丸遺跡より4.5kmほど北西の八千歳地区にある通称諏訪の原にある。本遺跡は、扇状地上を流れる天川の浸食作用で細長く帯状に発達した右岸の段丘上に立地している。遺跡の標高は約315mで、花鳥山遺跡や桂野遺跡の500m前後と比べると低い環境にあることが分かる。出土した土器は、桂野遺跡出土土器に類似した縄文中期の勝坂式系、阿玉台式系、加曾利E式系が主体となっており、当遺跡は、縄文中期の最盛期からその終わりにかけて栄えた遺跡の一つであることが想定できる。

豆塚遺跡（6）は御坂中丸遺跡より約4km北北西の金川扇状地の扇尖部に立地している。標高は約370mを測る。縄文時代の住居跡は、晩期前半の清水天王山式期のもので、郡内地域以外では初めて確認された。その住居跡は、直径3.5m、短径2.7mの小形長方形を呈しており炉は検出されていない。住居跡内からは清水天王山式土器を中心にも同時期の関東・東北系の土器群が出土している。

御坂中丸遺跡の北方には、帆瀬堂遺跡群（7）がある。地形の上では京戸川扇状地の扇尖部の甲州市と笛吹市の境界（標高約450m）に占地している。縄文時代を主体とし旧石器時代から平安時代にわたる遺跡である。調査区域は約二万平方メートルに及ぶ。本遺跡は、塙原北A、塙原北B、帆瀬堂、三口神平、野呂原の五地区からなる遺跡群としてとらえられている。発見された住居は縄文時代早期末～前期初頭38・前期20・中期24I以上・後期3を数える。特に塙越北A地区から発見された早期神之木台式期～下吉井式期の27軒の住居や土坑が集中する中央広場を8軒の住居が取り巻いている中期藤内式期の集落、三口神平地区の200を超える中期の住居や800基を数える土坑のあり方などは縄文時代の集落の構造や変遷を考える上で良好な資料となっている。また、三口神平地区を中心に土偶が多く出土しており、1988年に1,116点が国の重要文化財に指定され、その後、2005年には土器・石器4,483点が追加指定されている。これらの他に、古墳が1基、祭祀的な色合いが強い鉄製人形（県指定）を出土した奈良時代の小豊穴造構、それに平安時代の住居なども検出されている。

御坂中丸遺跡に近接した位置の遺跡としては、他に「駒留小丸遺跡（8）」「屋戸林遺跡（9）」「横堀B遺跡（10）」「八反田遺跡（11）」「横田遺跡（12）」「山王下遺跡（13）」「箕石遺跡（14）」「天狗平遺跡（15）」「三瀬農遺跡（16）」などが縄文遺跡として『山梨県遺跡地図』に掲載されている。



- 御坂中丸（1） 三光（2） 花鳥山（3） 桂野（4） 諏訪の原（5） 豆塚（6）
积迦堂（7） 鞠留小丸（8） 屋戸林（9） 横堀B（10） 八反田（11） 横田（12）
山王下（13） 箕石（14） 天狗平（15） 三瀬農（16）

地図1/50,000

第1図 遺跡位置図

第3章 平成21年度調査の成果

第1節 調査の方法と基本層序

第1項 調査の方法

1. 調査区とグリッドの設定（第2図）

調査は笛吹市御坂町上黒駒6209-1他の調査対象地の約2,000m²に4箇所の調査区を設定した。

グリッドの設定は近接して発掘調査されている地点の遺構との関係が容易に判断できるように世界測地系座標に基づいた5mに設定した。

また、本遺跡では調査区が4箇所に及んでいるため混乱を来さないよう順次北から南に向かってアルファベット大文字【A】から【K】まで、西から東方向はアラビア数字を【1】から【13】まで付した。グリッドの呼称は5m間隔で正方形に設置された杭の北東隅の杭の名称をグリッド名とすることとした。

2. 遺構掘削と記録方法

調査地点では、近隣での果樹経営や笛吹市道の道幅が狭く、コンクリート敷き簡易舗装であり、重機の進入によって影響が生じることが容易に想定できることから、通常、表土剥ぎに使用する大型重機の進入が不可能であった。このため3トン未満の小型重機に平爪バケットを装着し表土の除去を行った。

遺構確認面までは、試掘・確認調査の成果を基に目視による土層観察及び精査を実施しながら総合的に土壌の除去深度を決定し、重機により掘削深度を決定した。それより下層についての掘り下げは人力によってグリッド単位で遺構・遺物の把握に努めた。プランの判明した遺構に対しては土層堆積確認用のベルトを適宜設け平面・断面図等の図面作成を行った。図面は、当該遺跡がほぼ平坦で傾斜が少ないとから、調査後の図面整理が容易なことを考慮し、造り方測量を基本とした。また、危険深度まで達するような遺構については安全確保の観点から終ての調査終了後、埋め戻し時に安全確認を行った上で重機による断ち割り写真撮影をすることで対応することを基本的な考え方として調査にあたることとした。

記録写真は一眼レフカメラによる35mmモノクロおよびリバーサルフィルム撮影のほかデジタルカメラ、ネガカラーフィルムによる撮影を基本とし、必要に応じて中判カメラによる撮影も行うこととした。

第2項 基本層序

調査区地表面の標高は最高地点はH-13区付近で約591m、最も低い地点はJ-5区付近で約586.5mを測りおおよそ4.5mの比高差を有している。

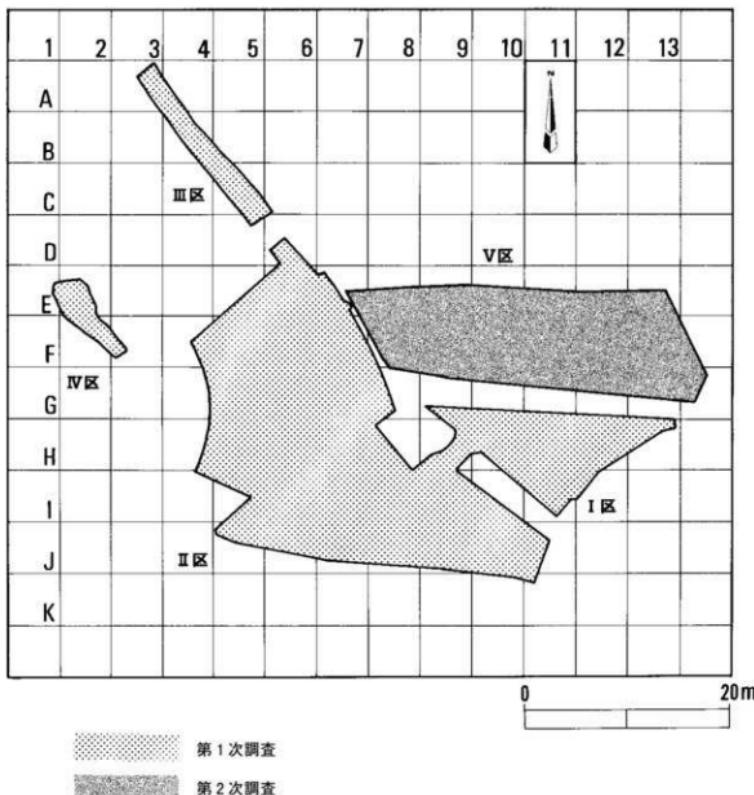
基本層序は調査区が横長なため土層堆積状況の良好な箇所を4地点【a～d地点】を選定し調査終了後の埋め戻し直前に、深掘りを実施し観察することとした。以下がその結果である。

【a 地点】

I-12区にあたる。約50cmの厚い耕作土層（第1層）の下に、上方から流入してきたと想定させる摩滅のひどい遺物を包含する第2層（黄茶褐色土）が約20cm堆積している。その下層にある第3層（淡黄褐色土）では、遺物の検出はなく1～3cmの角礫が多く混入し約20cmの堆積を見せていている。さらにその下層には、地山層である暗黄褐色のローム質土（第4層）が観察された。当層はさらに3層に細分できる。第4-1層（厚約50cm）では、粘性・しまり共に強く1cm以下の角礫がやや多く含まれている。第4-2層（厚約30cm）は、基本的に第3-1層と同じであるが角礫の包含される量が多い。第4-3層（厚30cm以上）では1cmの角礫の他に大型礫が所々に混入している。

【b 地点】

G-9区において観察した。調査対象地の標高が最も高い第1区にある。約50cmの厚い耕作土（第1層）の下に、



第2図 調査区画図

僅かに遺物が混入する第6層（淡茶褐色土）、第7層（暗黃褐色土）と続く。さらに下層には、a地点で観察された第2層があるが、こちらでは遺物の混入は認められなかった。

〔c地点〕

c地点（A-3区）は、調査対象地の北端部に当たる。ここでは、a地点と類似する堆積を観察することができた。約60cmの厚い耕作土の下、暗黃褐色土層（第2層）が確認された。さらに、その下層には、暗黃褐色ローム質土（4-3層）がある。

〔d地点〕

当地点（C-5区）では、約30cmの厚さの耕作土の下に、他の地点と同様に暗黃褐色土層（第2層）が観察されたが、ここでの堆積状況は10cm以下と薄い。その下方では3層に分層できる第4層（暗黃褐色ローム質土）、5層（黃褐色ローム質土）と続く堆積が確認できた。a地点とはほぼ同様の堆積であると思われる。

第2節 発見された遺構と遺物

第1項 土坑（第5・7・8図）

土坑は調査対象地の第I・II区から、合計71基が検出された。

第1号土坑（第5・7図）

H-12区より検出された。おおよそ半分が調査対象地外にあり、上縁・坑底ともに梢円形状をとるものと思われる。底面の状況は平坦である。坑内より4石ほどの礫が検出されている。壁の状況は確認されている箇所のみではあるが緩傾斜をもって立ち上がっている。各部の法量は、推定長軸100cm、深度48cmを測る。なお、遺物の出土は無かった。

第2号土坑（第5・7図）

H-12・13区より検出された。第3号土坑と連結しており、平面形状の上縁は、ほぼ梢円形状をとっている。坑底は、円形を呈していて平坦である。壁は、急傾斜をもって立ち上がっている。法量は、短軸55cm、深度77cmを測る。長軸の法量は不明である。坑内からの遺物の出土は無かった。

第3号土坑（第5・7図）

H-12区から第2号土坑と連結した状態で確認された。形状は、上縁・坑底とともに梢円形状をとる。坑底は平坦で壁は垂直に立ち上がっている。規模は短軸54cm、深度54cmである。長軸の法量は不明である。遺物の出土は縄文土器片が1点出土しているが時期の判断できるものでは無く、図示し得ない。

第4号土坑（第5・7図）

H-12区から確認された。第8号PITと連結しており、北側の一部分が調査区外に伸びている。形状は、上縁・坑底ともに不整形状をとるものと推測される。坑底は平坦で壁は垂直に立ち上がっている。規模は短軸80cm、深度60cmである。なお、長軸の法量は不明である。遺物の出土は縄文時代中期の深鉢型土器片が2点出土している。

第5号土坑（第5・8・9図）

H-11区から確認された。北西側に近接して第6号土坑が検出されている。形状は、上縁・坑底ともに隅丸長方形をとっている。坑底は平坦で壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がっている。規模は長軸108cm、短軸83cm、深度86cmを測る。坑内上面からは約40cmほどの自然石2石が蓋状に検出されている。遺物の出土は無かった。

第6号土坑（第5・8・9図）

H-11区から確認された。南東方向に近接して第5号土坑が検出されている。形状は、上縁・坑底ともに楕円形をとっている。坑底は平坦で壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がっている。規模は、長軸93cm、短軸85cm、深度57cmを測る。遺物は、縄文時代早期押型文と中期初頭五領ヶ台式深鉢形土器片がそれぞれ1点ずつ出土している。

第7号土坑（第5・8・9図）

H-11区から確認された。南方向において第8号土坑と連結しており、北側は試掘トレンチにより削平されている。形状は、不整形と想定できる。坑底は平坦で南側に小ビットを有している。壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がっている。規模は、長軸・短軸共に不明である。なお、深度51cmを測る。遺物は、縄文時代中期中葉井戸尻式の土器片が2点出土している。

第8号土坑（第5・8・9図）

H-11区から確認された。東側には、第7号土坑が切り合っている。北側は、試掘トレンチにより削平されている。形状は、検出された部分が少ないが、不整形と想定できよう。壁は急傾斜を持って立ち上がっている。規模は、長軸・短軸共に不明で深度28cmを測る。なお、遺物の出土は無かった。

第9号土坑（第5・8・9図）

H-11区から確認された。四方を第6・7・10・11・12・13号土坑に囲まれている。形状は上縁・坑底共に楕円形を呈しており、壁は、平坦な坑底より垂直に近い傾斜を持って立ち上がっている。規模は、長軸95cm、短軸75cm、深度64cmを測る。遺物は、縄文時代前期終末と推される矢羽根状文が付された土器片が1点出土している。

第10号土坑（第5・8・9図）

H-11区に位置している。北西側に第9号土坑、西側に第11号土坑がある。形状は上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底はほぼ平坦で、壁はやや急峻に立ち上がっている。規模は、長軸90cm、短軸68cm、深度40cmを測る。遺物は、無文の縄文土器片が1点出土している。

第11号土坑（第5・8・9図）

H-11区に位置している。北側に第9号土坑が近接している。形状は上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は平坦で、緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸130cm、短軸86cmを測り、深度は23cmと浅い。遺物の出土はない。

第12号土坑（第5・8・9・10図）

H-10区において確認された。東方に第9・11号土坑が、北側に第13号土坑が隣接している。形状は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸99cm、短軸75cmを測り、深度は25cmと浅い。遺物の出土は無かった。

第13号土坑（第5・8・9・10図）

H-10・11区において確認された。形状は上縁・坑底共に隅丸方形を呈しており、坑底は平坦である。壁は、垂直に近い角度を持って立ち上がっている。規模は、長軸146cm、短軸135cmと大きく、深度は75cmと深い。遺物の出土は無い。

第14号土坑（第5・10・11図）

H-10区において確認された。およそ、半分が調査区外に伸びているため、平面形について上縁部は楕円形を呈していると推測できよう。深度が深いため坑底の状況は把握できない。規模は、長軸が190cmである。壁の立ち上がりは、垂直に近い傾きから上縁に向かうにつれ、緩やかに開口していく、いわゆる朝顔状とすることができる。当土坑は、その状況から井戸の可能性があるものと思われる。遺物の出土は無かった。

第15号土坑（第5・10・11図）

H-10区において確認された。西側に接して第17号土坑が占地している。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底の状況は疊が検出されているため判断に苦しむ。壁は、垂直に近い傾斜で直線的に伸びる。規模は、長軸71cm、短軸60cm、深度85cmを測る。なお、遺物の出土は無かった。

第16号土坑（第5・10・11図）

G-10区において検出された。西側には第20号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底の状況は、面積が狭いながらも、ほぼ平坦で壁は、急角度で伸びていく。規模は、長軸60cm、短軸53cm、深度45cmを測る。遺物の出土は無い。

第17号土坑（第5・10・11図）

H-10区において検出された。西側に第18・19号土坑が、北東に第15号土坑がある。平面形は上縁・坑底共には円形を呈している。坑底は平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。規模は、長軸69cm、短軸66cm、深度55cmを測る。遺物は磨製石斧が1点出土している。

第18号土坑（第5・10・11図）

H-10区において検出された。西側にて第19号土坑と接している。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑内には拳大ほどの自然石が混入している。坑底は平坦で壁はなだらかに上縁に向かっている。規模は、長軸75cm、短軸63cm、深度28cmを測る。遺物は、縄文時代中期初頭五領ヶ台式の深鉢形土器片と縄文中期の土偶の脚部が1点ずつ出土している。

第19号土坑（第5・10・11図）

H-9・10区に跨って検出された。東側で第18号土坑と接している。平面形は上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑内には人頭大の自然石が混入している。坑底は平坦に近く、壁はなだらかに上縁に開口していく。長軸62cm、短軸56cm、深度25cmを測る。遺物の出土は無かった。

第20号土坑（第5・10・11図）

G-9・10区に跨って検出された。西側に第21号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に円形に近い楕円形と見ることができよう。坑内には拳大から約30cmほどの自然石が多く混入されていたことから、坑底の状況は不明である。壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がる形状をしている。規模は、長軸66cm、短軸56cm、深度45cmを測る。遺物の出土は無かった。

第21号土坑（第5・10・11図）

G-9区より検出された。東側に第20号土坑が位置している。平面形は、上縁・坑底共に楕円形をしていて、坑内には大小の自然石が多く混入しており、第20号土坑と様相が類似している。坑底の状況は、上記のことなどか

ら判断に苦しむが平坦と見て良さそうである。壁はやや急角度で立ち上がっている。規模は、長軸83cm、短軸65cm、深度28cmを測る。遺物の出土は無かった。

第22号土坑（第5・10・11図）

G-9区に位置している。僅かではあるが北側調査区外に上縁部が伸びている。坑内に大振りな自然石の混入があるものの、平面形は上縁・坑底共に楕円形とみることができる。坑底は平坦で、壁は垂直に近い角度で直線状に立ち上がっている。その規模は、短軸75cm、深度43cmを測る。遺物の出土は無かった。

第23号土坑（第6・12図）

I-9区に位置している。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は、ほぼ平坦で壁はやや急角度で上縁に向かって開口していく。規模は、長軸78cm、短軸48cm、深度42cmを測る。遺物の出土は無い。

第24号土坑（第6・13図）

I-8区において検出された。平面形は上縁・坑底共にほぼ楕円形状をとっている。坑底の状況は、南東方向に向かって傾斜している。壁は、西側ではややなだらかに、東側では急角度で開口している。規模は、長軸90cm、短軸72cm、深度52cmを測る。なお、遺物の出土は無い。

第25号土坑（第6・13図）

I-7・J-7区に跨って検出された。平面形は、上縁・坑底共にほぼ円形を呈している。坑底は、東側から西側に向かって傾斜している。壁は、西側では急傾斜、東側ではなだらかに立ち上がりしていく。規模は、長軸63cm、短軸60cm、深度35cmを測る。遺物の出土は無い。

第26号土坑（第6・13・14図）

I-7区において検出された。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は、ほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がりしていく。規模は、長軸64cm、短軸57cm、深度51cmを測る。遺物の出土は無い。

第27号土坑（第6・13・14図）

I-7区において検出された。東側に第26号土坑、南西に第28号土坑が近距離に位置している。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は、ほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がりていく。規模は、長軸70cm、短軸61cm、深度46cmを測る。遺物は、縄文時代後期前葉の堀之内式の土器片が1点出土している。

第28号土坑（第6・13・14図）

I-7区において検出された。左右を第27・29号土坑に挟まれる位置にある。坑内には拳大ほどの自然石が混入されていた。平面形は、上縁が隅丸方形、坑底は楕円形をとっている。坑底は西から東に向かって傾斜を持っている。壁は、やや急傾斜で開口している。規模は、長軸55cm、短軸52cm、深度24cmを測る。なお、図示し得る遺物の出土はなかった。

第29号土坑（第6・14図）

I-7区に位置している。第27・28号土坑と直列に並んだ状況で検出された。平面形は、上縁・坑底共に円形に近い楕円形を呈している。坑底は平坦で壁は緩い傾斜での立ち上がりを持つ。規模は、長軸70cm、短軸62cm、深度27cmを測る。なお、遺物の出土は無かった。

第30号土坑（第6・15・16図）

I-6区に位置している。北に第31号土坑、西に第33・34号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈している。坑底は若干東側に傾斜を持っている。壁はやや急傾斜で立ち上がっている。規模は、長軸92cm、短軸73cm、深度37cmを測る。遺物の出土は無かった。

第31号土坑（第6・15・16図）

I-6区に位置している。南側に第30号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に楕円形を呈しており、坑底は僅かに傾斜がみられるものの、ほぼ平坦といって良いだろう。壁は、やや傾斜を持って立ち上がる。規模は、長軸88cm、短軸78cm、深度29cmを測る。出土遺物としては、後期前葉塚之内式と推される微隆帶上に刺突列のある土器片が1点出土している。

第32号土坑（第6・15・16図）

I-5区に位置している。南側の至近距離に第33・34号土坑がある。平面形は、楕円形もしくは不整形となるものと思われる。坑底は西向きに傾斜を持っている。壁は、緩やかな傾斜で開口していく。その規模は、長軸95cm、短軸推定40cm、深度21cmを測る。遺物の出土は無かった。

第33号土坑（第6・15・16図）

I-5区に位置している。西側に近接して第34号土坑がある。平面形は上縁・坑底共にほぼ円形に近い楕円形を呈している。坑底は面積が狭いものの平坦で、壁は概ね45度の角度で開口している。規模は、長軸65cm、短軸59cm、深度25cmを測る。遺物の出土は無い。

第34号土坑（第6・15・16図）

I-5区において確認された。東側に近接して第33号土坑がある。平面形は上縁・坑底共にほぼ円形に近い楕円形を呈している。坑底は平坦で、壁はやや緩い傾斜で立ち上がっていく。規模は、長軸73cm、短軸70cm、深度15cmを測る。遺物の出土は無かった。

第35号土坑（第6・17・18図）

F-4区において検出された。北東方向の至近距離に第36号土坑が位置している。平面形は上縁・坑底共に楕円形状をとる。坑内からは30cm以上の自然石が確認されている。坑底は、西方向に傾斜を持たせており、壁はやや急角度で開口していく。その規模は、長軸111cm、短軸81cm、深度59cmを測るものである。遺物は、縄文時代中期初頭五領ヶ台式1点・後期前葉塚之内式2点の計3点の土器破片資料が出土している。なお、後期前葉塚之内式の内、1点は粗製土器である。

第36号土坑（第6・17・18図）

F-4・5区に跨って検出された。南西に第35号土坑がある。北側の一部分は調査区外に伸びている。上縁・坑底共に不整円形を呈するものと推測される。坑底は平坦ではなく、やや丸みを帯びた形状をし、さらに小ピットが2箇所に認められる。壁は西側では急峻に、東側ではだらかに開口していく。規模は、短軸109cm、深度57cmを測るものである。遺物は、波状口縁で隆帯を持つ後期前葉塚之内式の土器破片資料が1点出土している。

第37号土坑（第6・17・18図）

F-5区より検出された。南側に第38・39号土坑が近接して存在する。平面形は上縁・坑底共に楕円形状を示し

ている。坑内からは30cm以下の自然石が多く検出されている。坑底は僅かに傾斜しているが平坦と言っても良いものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。その規模は、長軸77cm、短軸61cm、深度45cmを測るものである。遺物の出土は無い。

第38号土坑（第6・17・18図）

F-5区より検出された。北に第37号土坑が、北東に第39号土坑が確認されている。平面形は上縁・坑底共に円形に近い楕円形状をとっている。坑底はほぼ平坦で壁は垂直に近い傾斜で立ち上がっていく。規模は、長軸92cm、短軸81cm、深度40cmを測るものである。遺物の出土は無い。

第39号土坑（第6・17・18図）

F-5区より検出された。北西に第37号土坑が、南西に第38号土坑が存在する。平面形は上縁・坑底共に円形に近い楕円形状をとっている。坑内には30cm程の自然石が混入されている。坑底はほぼ平坦で、壁は垂直に近い傾斜で立ち上がっていく。規模は、長軸87cm、短軸80cm、深度40cmを測るものである。遺物の出土は無い。

第40号土坑（第6・17・18図）

F-5・G-5区に跨って検出された。南側に第41号土坑が、北側に第38号土坑が位置している。平面形は上縁・坑底共に円形に近い楕円形状をとっている。坑内には拳大から50cm程の自然石が多く混入されている。坑底は平坦で、壁はやや急角度で立ち上がっている。規模は、長軸153cm、短軸140cm、深度45cmを測る大型の土坑である。遺物は、縄文時代中期初頭五領ヶ台式の沈線が施文されている土器片が1点出土している。

第41号土坑（第6・17・18図）

G-4・5区に跨って検出された。北側に第40号土坑がある。平面形は、上縁はほぼ円形に近く、坑底は楕円形状である。坑底に自然石があるため形状は平坦ではなく丸みを帯びているように推定できる。壁は、非常に緩やかに上縁に向かって開口している。規模は、長軸71cm、短軸70cmを測り、深度は16cmと浅い。遺物の出土は無かった。

第42号土坑（第6・17・18・19図）

G-5区より検出された。北側に第43号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に円形に近い楕円形状をとる。坑底に大型の自然石があるが平坦であることが理解できる。壁は、やや急傾斜で開口している。規模は、長軸97cm、短軸85cm、深度43cmを測る。なお、遺物の出土は無かった。

第43号土坑（第6・17・18・19図）

G-5区より検出された。南西に第42号土坑、東に第45号土坑、北東に第44号土坑が近接している。坑底は平坦で、壁は北側では急峻に、南側では緩やかに開口していく。平面形は上縁は楕円形、坑底では不整形状をしている。規模は、長軸105cm、短軸100cmと大型で深度は51cmを測る。遺物は、沈線を持つ縄文時代後期前葉掘之内1式の土器片が1点出土している。

第44号土坑（第6・17・18・19図）

G-5区より検出された。南方向に第42・43・45号土坑が近接して存在する。平面形は上縁・坑底共には楕円形を呈している。坑内下部より約20cmの自然石が検出されている。壁は、やや緩い角度をもって立ち上がりを見せれる。規模は、長軸80cm、短軸65cm、深度31cmを測る。なお、遺物の出土は無い。

第45号土坑（第6・17・18・19図）

G-5区より検出された。北に第44号土坑が、西に第43号土坑が近接している。平面形は上縁はほぼ円形に近い椭円形を呈している。坑底の状況は自然石が混入しているため不明である。壁の立ち上がりはなだらかに開口している。規模は、長軸61cm、短軸55cm、深度26cmを測る。遺物は、縄文時代中期後半曾利Ⅲ～Ⅳ式の深鉢形土器破片が1点出土している。

第46号土坑（第6・17・18・19図）

F-5区より検出された。北西部でピットと接続している。東及び北東に第47・48号土坑が近接している。平面形は上縁・坑底共に不整円形を呈している。坑底の状況は平坦で、壁はやや急角度で立ち上がっていく。規模は、長軸78cm、短軸76cm、深度22cmを測る。遺物は、出土していない。

第47号土坑（第6・17・19図）

F-5区において確認された。近接して第46・48号土坑が位置している。平面形は、上縁・坑底共に椭円形を呈している。坑底の状況は平坦で、壁は角度をもって立ち上がりをみせている。規模は、長軸65cm、短軸58cm、深度32cmを測る。なお、遺物は出土していない。

第48号土坑（第6・17・19図）

F-5区において確認された。第46・47号土坑と近接した位置で検出された。平面形は、上縁・坑底共にはほぼ円形を呈している。坑底の状況は平坦で、壁は角度をもって立ち上がっている。規模は、長軸62cm、短軸60cm、深度31cmを測る。なお、遺物は出土していない。

第49号土坑（第6・17・19図）

F-5区において確認された。第50・51号土坑と直列に並んだ状態で検出された。平面形は、上縁・坑底共に椭円形を呈している。坑底の状況は平坦で、壁は角度をもって立ち上がっている。規模は、長軸101cm、短軸87cm、深度26cmを測る。なお、遺物は出土していない。

第50号土坑（第6・17・19図）

F-5区において確認された。第49・51号土坑と直列に並んだ状態で検出された。平面形は、上縁・坑底共にはほぼ円形を呈している。坑底の状況は平坦で、壁は角度をもって立ち上がっている。規模は、長軸83cm、短軸80cm、深度30cmを測る。なお、遺物は出土していない。

第51号土坑（第6・19図）

F-5・6区において確認された。第49・50号土坑と直列に並んだ状態で検出された。平面形は、上縁・坑底共に椭円形を呈している。坑底の状況は平坦で、壁は角度をもって立ち上がっている。規模は、長軸86cm、短軸68cm、深度25cmを測る。遺物の出土は無い。

第52号土坑（第6・20・21図）

E-6区にて検出された大型の土坑である。近接して、北に第54号土坑が、南東から東方向に第53・59号土坑が確認されている。平面形は、上縁・坑底共に不整椭円形を呈している。坑底は平坦で、壁はやや角度を付けて開口している。規模は、長軸185cm、短軸140cmと大きく深度は46cmを測る。なお、遺物の出土は無かった。

第53号土坑（第6・20・21図）

E-6区にて検出された土坑である。近接して、第52・59号土坑が確認されている。平面形は、上縁・坑底共に不整形を呈している。坑底は平坦で、壁はやや角度を付けて開口している。規模は、長軸103cm、短軸72cm、深度40cmを測る。なお、遺物の出土は無い。

第54号土坑（第6・20・21図）

E-6区において検出された。南側には第52号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に円形に近い橢円形状をとっている。坑底は平坦で、壁は角度を付けて開口している。規模は、長軸75cm、短軸59cm、深度26cmを測る。なお、遺物は縄文時代後期前葉層之内1式の土器片が1点出土している。

第55号土坑（第6・20・21図）

D-6区において検出された。遺構の半分以上が調査区外にあるため、平面形は橢円形状をとっていると推定するしかない。坑底からは2基のビットが検出されている。規模は、長軸82cm、深度は49cmとしか計測できない。遺物の出土は無かった。

第56号土坑（第6・20・21図）

D-6区において第57・58号土坑と直線に並ぶ位置に検出された。遺構の西側の一部分が調査区外に伸びるため、平面形は上縁・坑底共に橢円形状と推定している。底には約20cmの自然石が混入している。また、坑底はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がっていている。規模は、短軸89cm、深度34cmを測る。なお、長軸は不明である。また、遺物の出土は無かった。

第57号土坑（第6・20・21図）

D-6区にて、検出された。第56・58号土坑と直線に並ぶ。平面形は上縁・坑底共に橢円形状をとる。坑底は平坦であるが、北側から南方向に向けて傾斜しており、壁はやや角度を持って立ち上がっていく。規模は、長軸71cm、短軸53cm、深度30cmを測る。なお、遺物の出土は認められなかった。

第58号土坑（第6・20・21図）

E-6区にて検出され、第56・57号土坑と直線に並んでいる。坑内には拳大の自然石が混入されていた。平面形は上縁・坑底共に橢円形状をとっている。坑底は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がってている。規模は、長軸59cm、短軸46cmを測り、深度は20cmと浅い。坑内からは、条線を持つ縄文時代中期後半曾利IV式の深鉢形土器の破片が1点出土している。

第59号土坑（第6・20・21図）

E-6区にて検出された。周囲からは第52・53号土坑などが検出されている。平面形は、上縁・坑底共にほぼ円形を呈している。坑底は丸底で、壁は上縁に向かって緩やかな立ち上がりをみせている。規模は、長軸61cm、短軸58cm、深度28cmを測る。なお、遺物の出土は無かった。

第60号土坑（第6・20・21図）

E-6区において検出された。平面形は、上縁・坑底共にほぼ円形を呈している。坑底は北から南に向かって傾斜している。壁は、やや角度を持って立ち上がっていく。規模は、長軸76cm、短軸73cm、深度42cmを測る。遺物の出土は無い。

第61号土坑（第6・19図）

F-6区において確認された。平面形は、上縁・坑底共に円形を呈している。坑内には、拳大から約60cmの角礫が混入されている。坑底は平坦で、急傾斜で上縁に向かって立ち上がっている。規模は、長軸102cm、短軸101cm、深度35cmを測る。遺物の出土は無い。

第62号土坑（第6・14図）

H-6区において確認された。南側には近接して第63号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共にはほぼ円形を呈している。坑内には拳大の角礫が僅かに混入されている。坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸62cm、短軸58cm、深度23cmを測る。なお、遺物の出土は無かった。

第63号土坑（第6・14図）

H-6区において確認された。北側には近接して第62号土坑がある。平面形は、上縁・坑底共に楕円形状を呈している。坑底はほぼ平坦で、壁はやや急角度で立ち上がっている。規模は、長軸67cm、短軸58cm、深度25cmを測る。なお、遺物の出土は無かった。

第64号土坑（第6・15・16図）

G-5・H-5区において確認された。平面形は、上縁・坑底共に楕円形状を呈している。坑底は平坦で壁は急傾斜で立ち上がっていく。坑内には拳大から約30cmの角礫の混入がみられる。規模は、長軸130cm、短軸103cm、深度40cmを測る。遺物の出土は無い。

第65号土坑（第6・15・16図）

H-5・6区において検出された。平面形は、上縁・坑底共に楕円形状を呈している。坑底は平坦で壁は急傾斜で立ち上がりしていく。坑内には拳大から約40cmの角礫の混入が多量にみられる。規模は、長軸130cm、短軸92cm、深度は56cmを測る。遺物の出土は無い。本土坑は礫の混入状況から土坑ではなく搅乱の可能性も捨てきれない。

第66号土坑（第6・15・16図）

H-6区において検出された。西側には近接して第67号土坑がある。平面形は上縁・坑底共に円形を呈している。坑底は平坦で壁は急角度で立ち上がっている。規模は、長軸69cm、短軸61cm、深度40cmを測る。遺物の出土は無かった。

第67号土坑（第6・15・16図）

H-6区において検出された。東側には近接して第66号土坑がある。平面形は上縁・坑底共に円形を呈している。坑底は平坦で壁は急角度で立ち上がっている。規模は、長軸95cm、短軸81cm、深度43cmを測る。なお、遺物の出土は無かった。

第68号土坑（第6・15・16図）

H-5・6及びI-5・6区に跨って検出された。平面形は上縁は楕円形、坑底は不整形を呈している。坑底の状況は平坦で壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸122cm、短軸105cm、深度27cmを測るやや大振りの土坑である。遺物は、隆帶が施された縄文時代中期後半曾利IV式にあたる深鉢形土器の破片が1点出土している。

第69号土坑（第6・15・16図）

I-5区において検出された。平面形は上縁・坑底共にはほぼ円形を呈している。坑底の状況は平坦で壁はやや急

角度で立ち上がっていく。規模は、長軸65cm、短軸63cm、深度43cmを測る。遺物は縄文と沈線がある縄文時代中期初頭五領ヶ台式深鉢形土器片が1点出土している。

第70号土坑（第6・15・16図）

I-5区において検出された。南側に第69号土坑、南西方向に第71号土坑が近接して位置している。平面形状は円形を呈している。なお、坑底面の形状は不明である。壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸63cm、短軸58cm、深度25cmを測る。本土坑には大小の自然石が多量に混入していることから、搅乱の可能性が大である。遺物は縄文時代早期打越式の土器片が1点出土している。

第71号土坑（第6・15・16図）

H-5・I-5区において検出された。東方に第69・70号土坑が位置している。平面形は上縁・坑底共に梢円形を呈している。坑底は平坦で壁は緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸104cm、短軸60cm、深度30cmを測る。遺物の出土は無い。

第2項 ピット（第5・6・7・8・10・12・14・15・17・18・19・20・21図）

ピットは、調査対象地の第I・II区より44基が検出されている。覆土中に遺物が包含されているものは無いため構築時代を検証することは難しい。

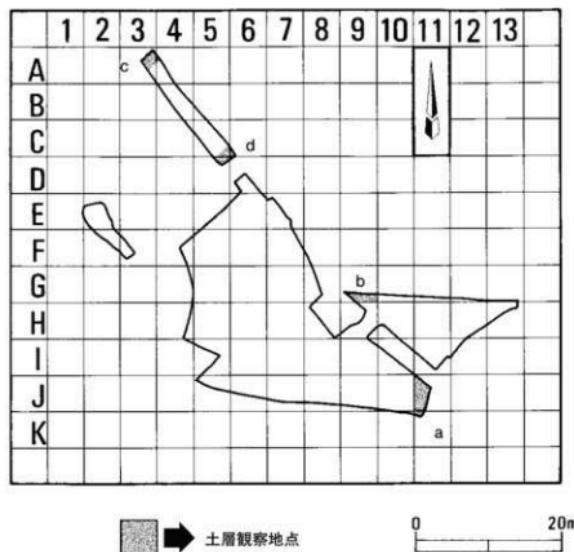
第3節　まとめ

本遺跡は、金川右岸の支谷である相沢の台地上に立地している。相沢を挟んで東側の台地を中丸、西側の台地を上の山と呼び、どちらの台地にも縄文時代の遺跡が認められるが、普通、両方を一括して中丸遺跡と呼んでいるが笛吹市境川町にも同名の中丸遺跡があり、差別化するために今回の調査では、御坂中丸遺跡とした。この中丸遺跡からは大正6年に日本考古学史上非常に有名な「黒駒の土偶」が発見されており、現在は、東京国立博物館に収蔵されている。

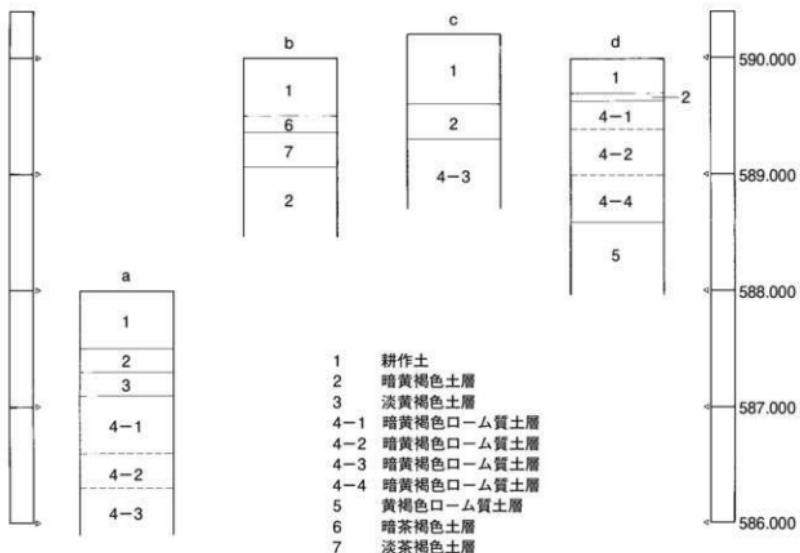
今回の調査対象地は、周知された遺跡範囲の西側縁辺部の狭い範囲に設定されており、遺構としては、約70基あまりの土坑とピットのみの検出で、他の遺構は確認できなかった。その分布はI・II区の西～南寄りに集中がみられるものの、まとまりについては判断は難しい。また形状は各節でも述べているように多様である。

出土遺物についてのほとんどが、遺物包含層（遺構外）からの土器片で、時期は縄文時代早期から後期まで、個体となるものは検出されなかった。中でも、早期の土器片が多く15点が検出している。その内訳は、押型文系が1点と残りが古屋敷遺跡早期第IV群土器である。古屋敷遺跡は、1983年と1988年の二期に渡って発掘調査がなされたものであり、その発掘調査成果の中で阿部芳郎氏によって早期後半で野島式に併行する山梨県・長野県諏訪方面に類似する形態がみられる地域的独自性の強い土器群として位置付けがなされ、県内では笛吹市境川町遺跡・寺平遺跡に類例をみることができる。器形はいわゆる、尖底深鉢形であり、1～3類に細分されている。1・2類では段帶部に単節斜縄文または疑似羽状縄文と縄文を地文として沈線文を持つものとされている。3類は口縁部が厚く外反する無文のものである。この内、今回の調査で出土したものは3類の特徴を持つものが多いようである。

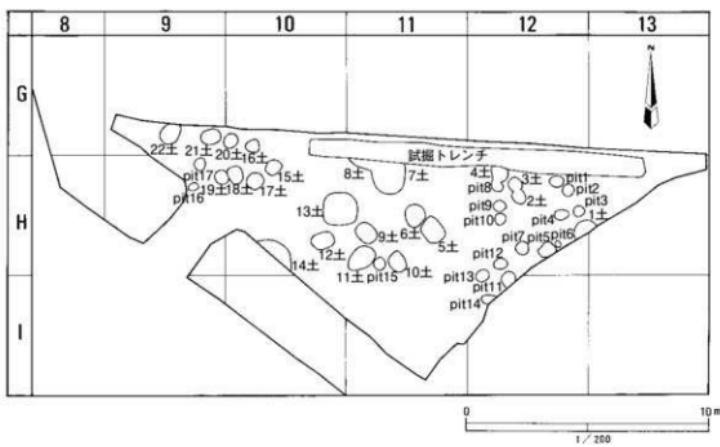
これらの事から縄文時代古屋敷遺跡早期第IV群土器の分布域が御坂峠を越えて、甲府盆地東南部にまで達していたことが再検証されたこととなろう。



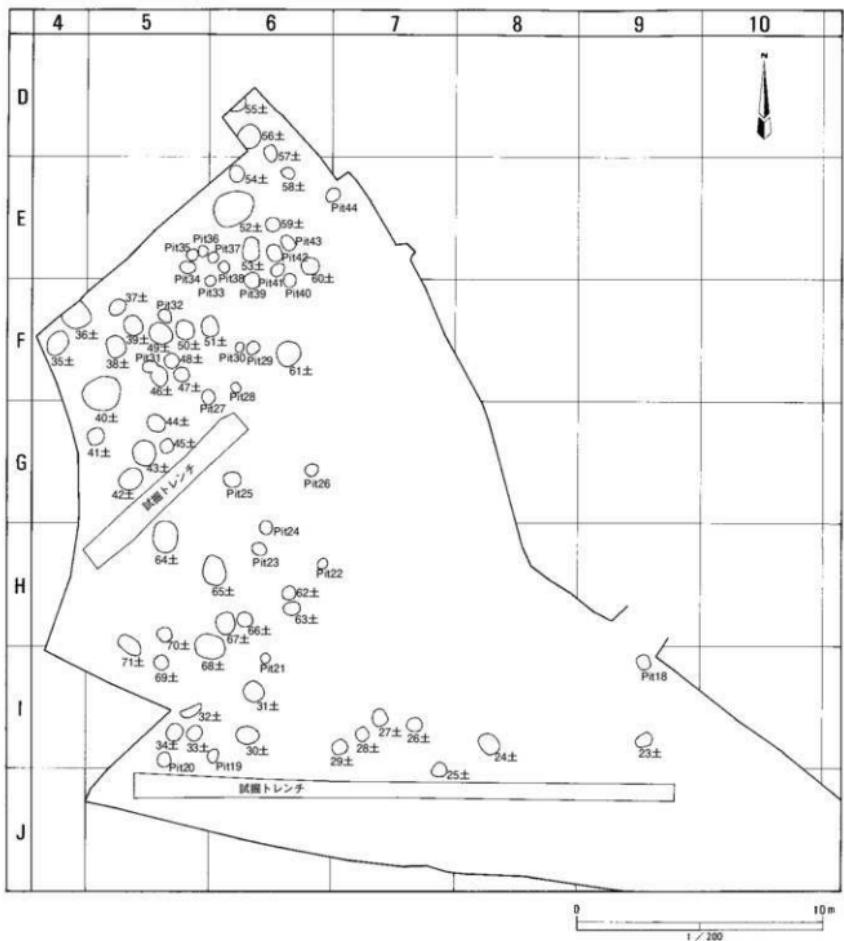
第3図 基本層序観察地点



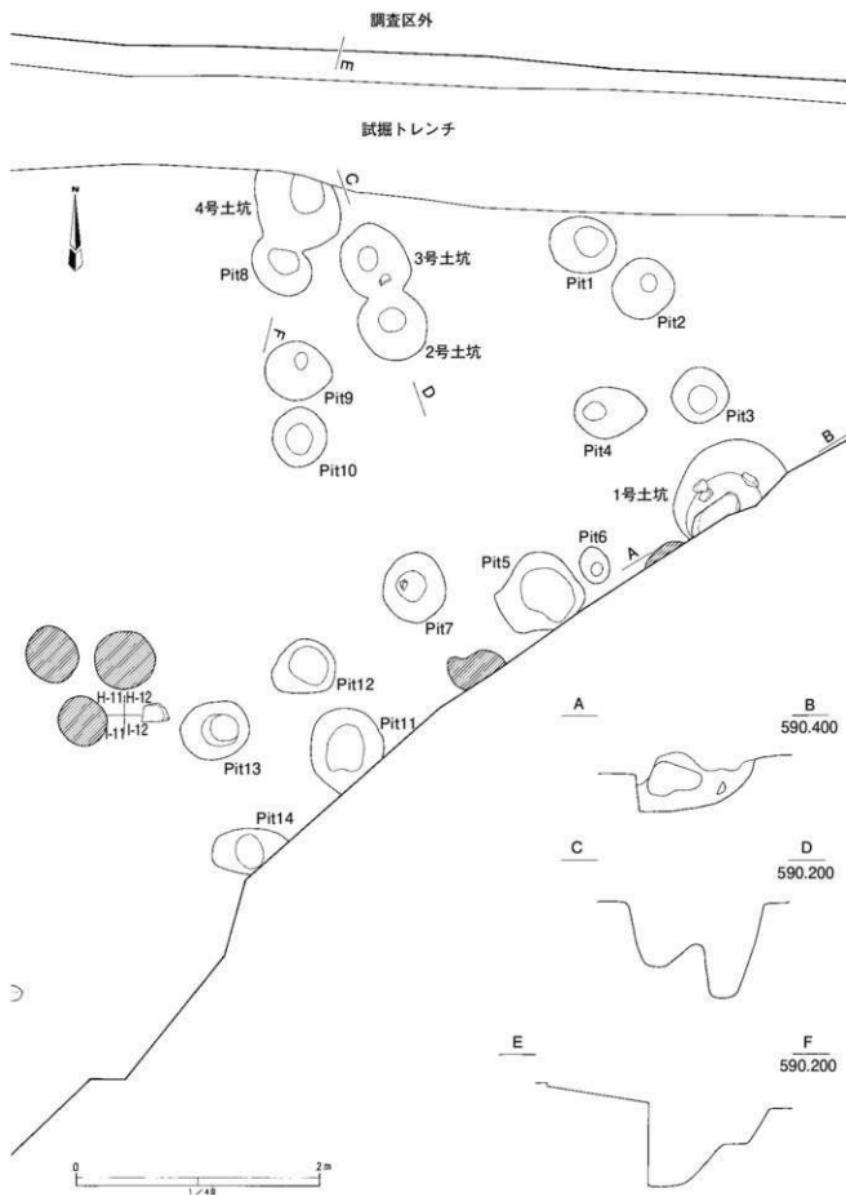
第4図 基本層序柱状図



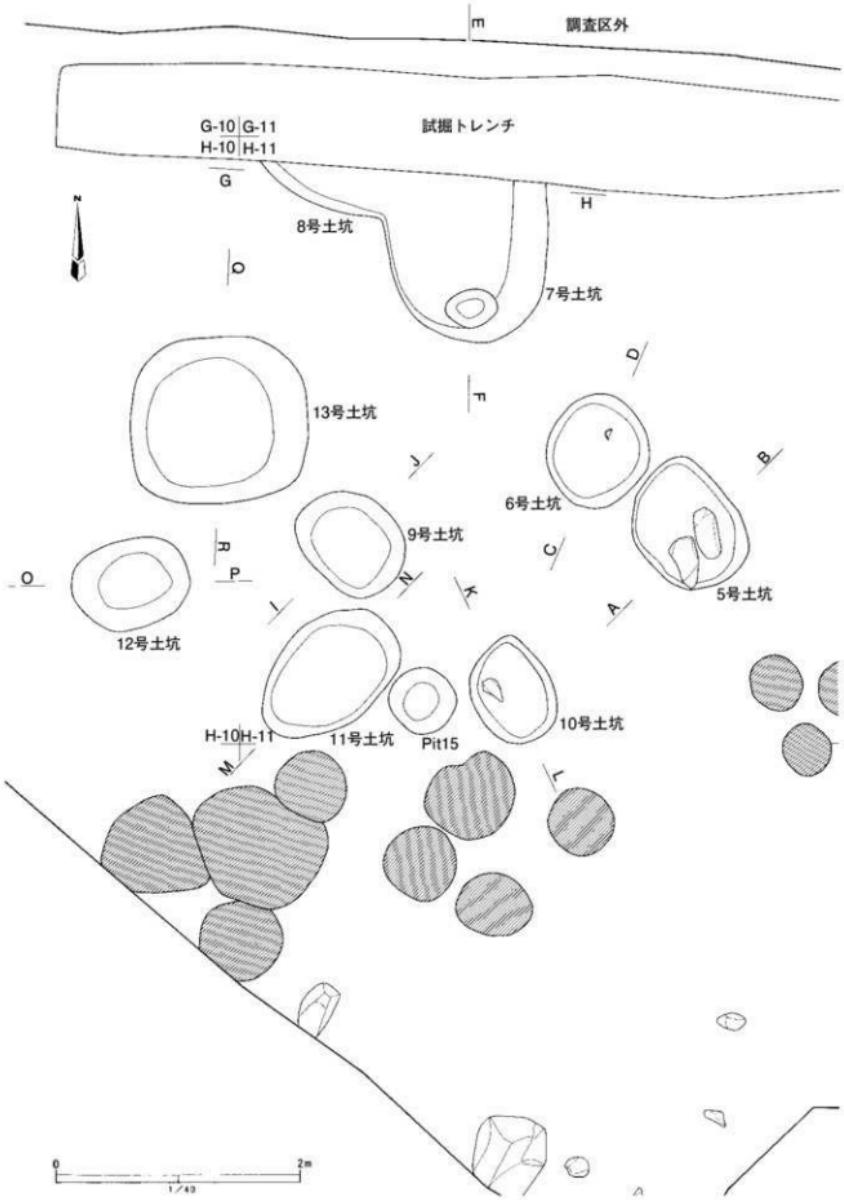
第5図 I区土坑・ピット配置図



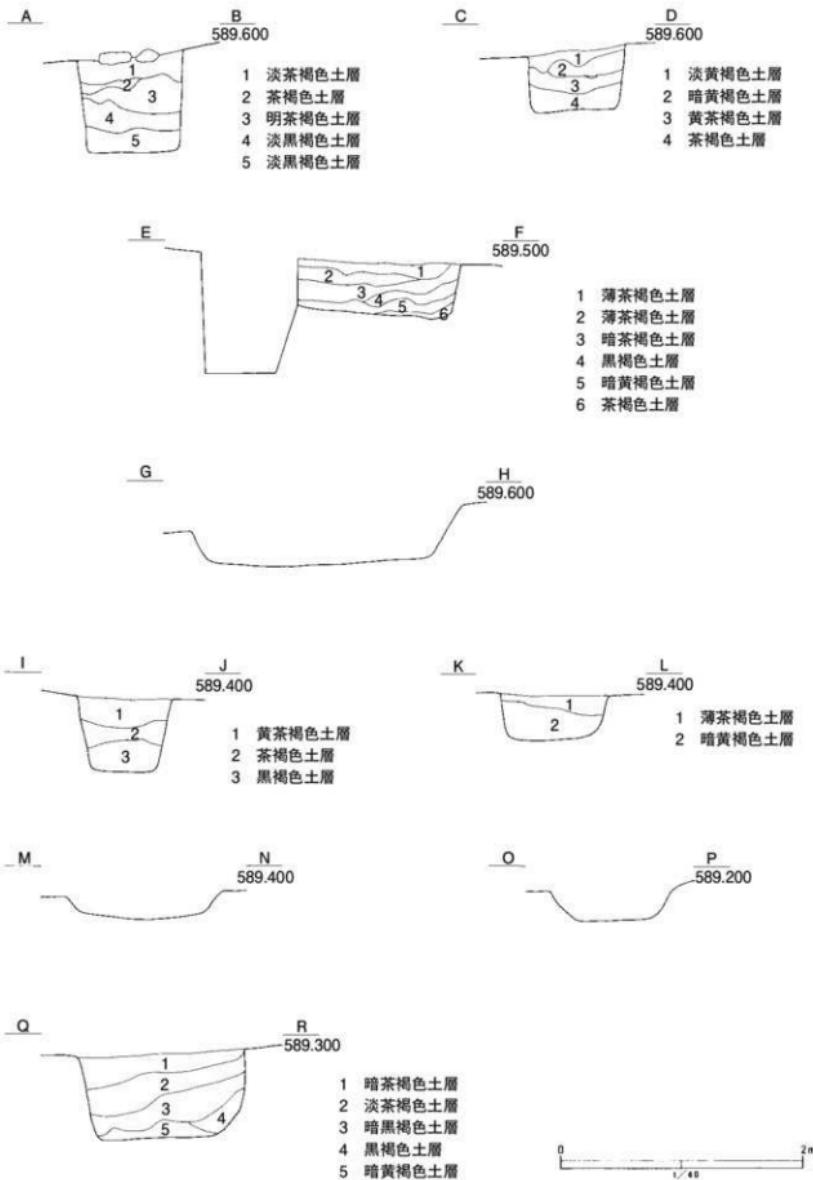
第6図 II区土坑・ピット配置図



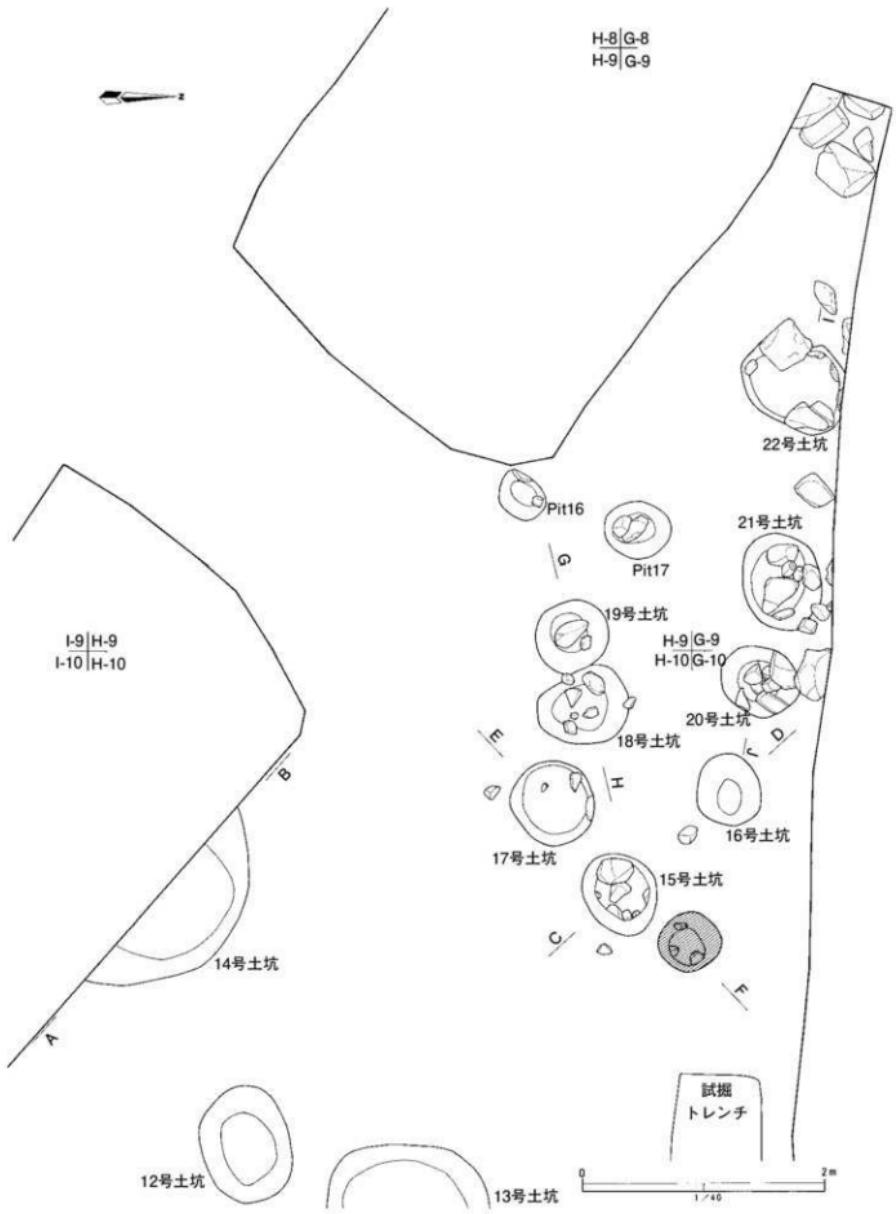
第7図 第1～4号土坑平・断面図



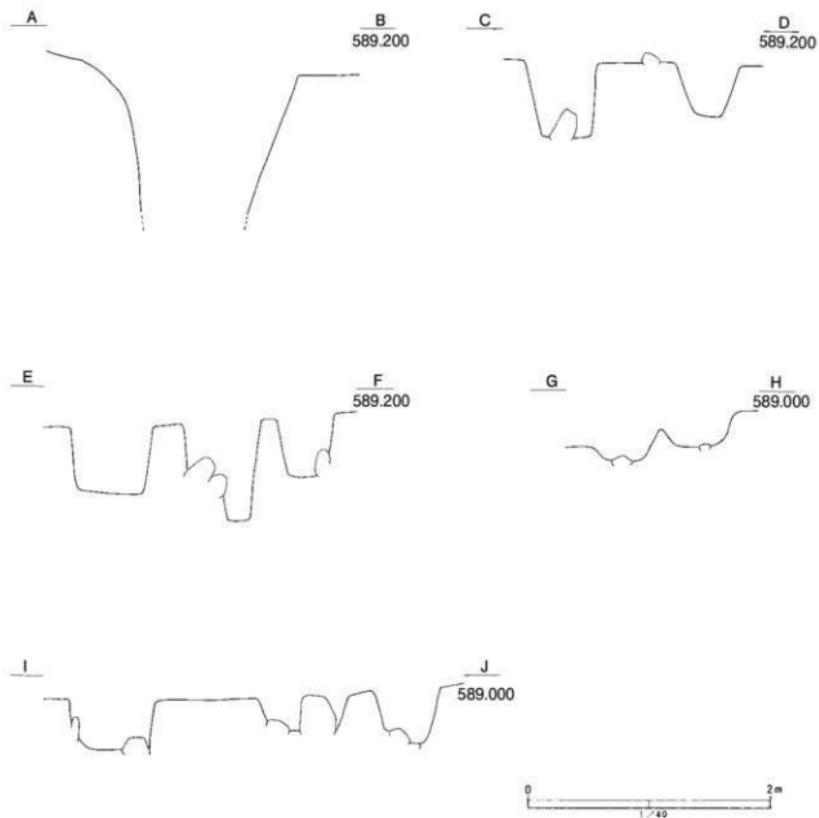
第8図 第5～13号土坑平面図



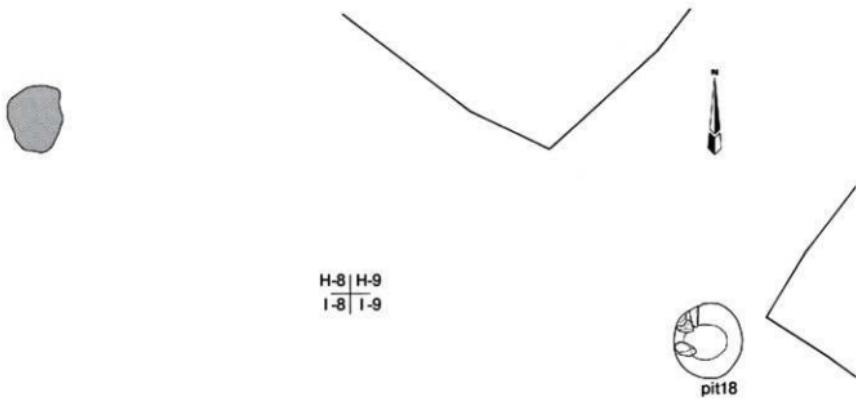
第9図 第5～13号土坑断面図



第10図 第14~22号土坑平面図



第11図 第14～22号土坑断面図

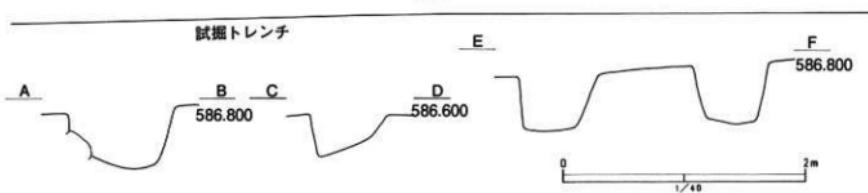
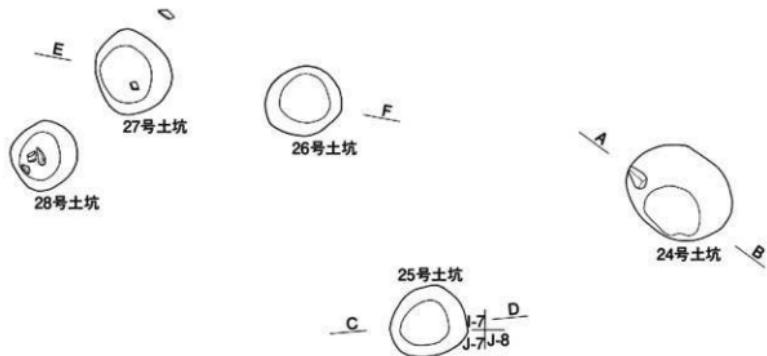
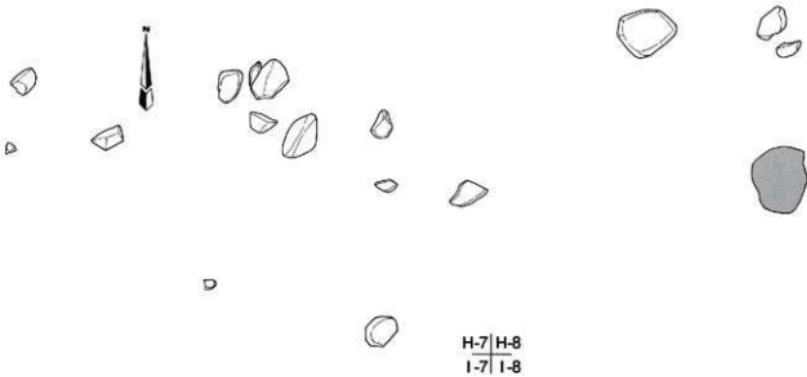


I-8 | I-9
J-8 | J-9

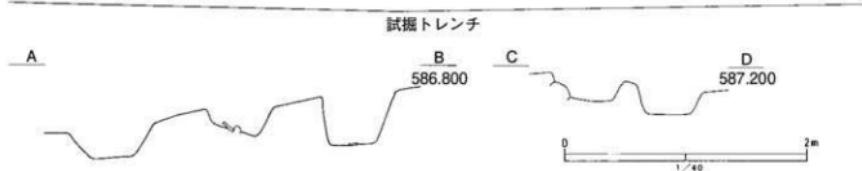
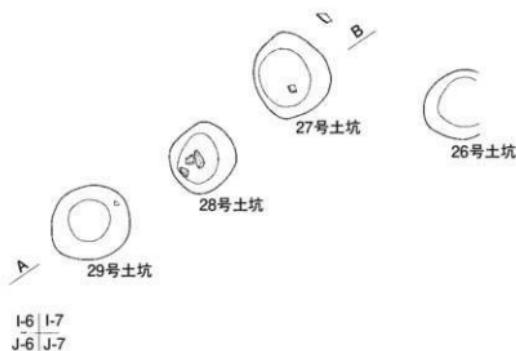
試掘トレンチ



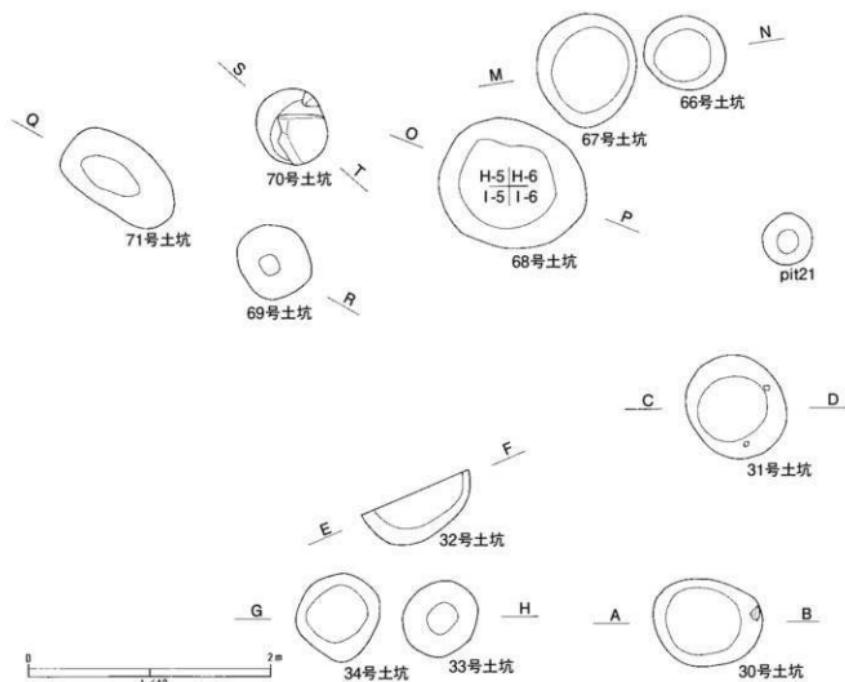
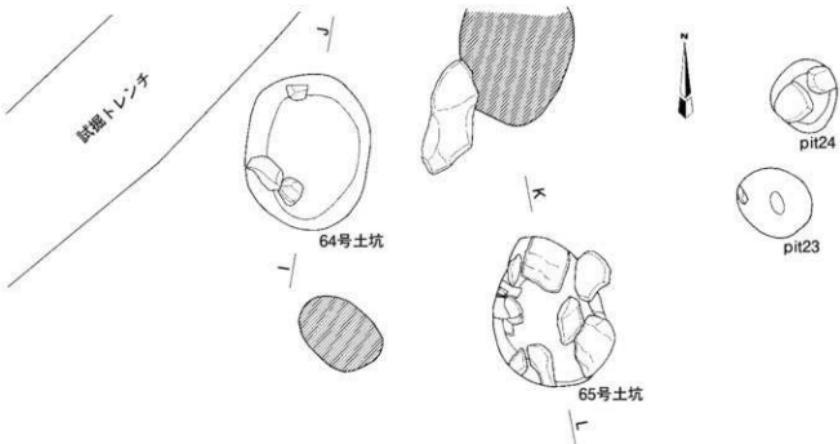
第12図 第23号土坑平・断面図



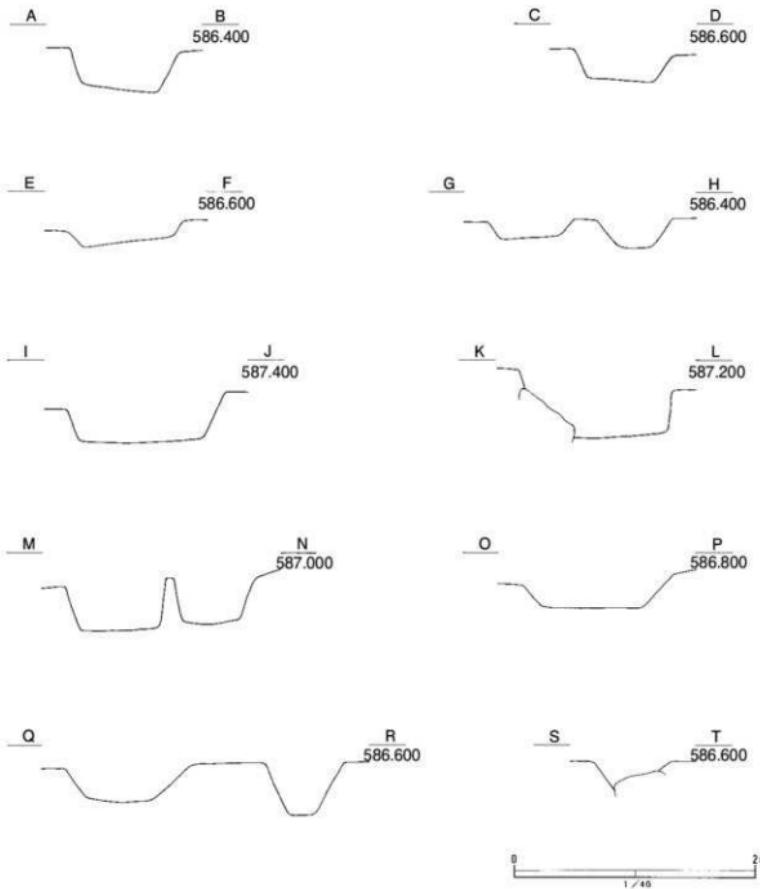
第13図 第24~27号土坑平・断面図



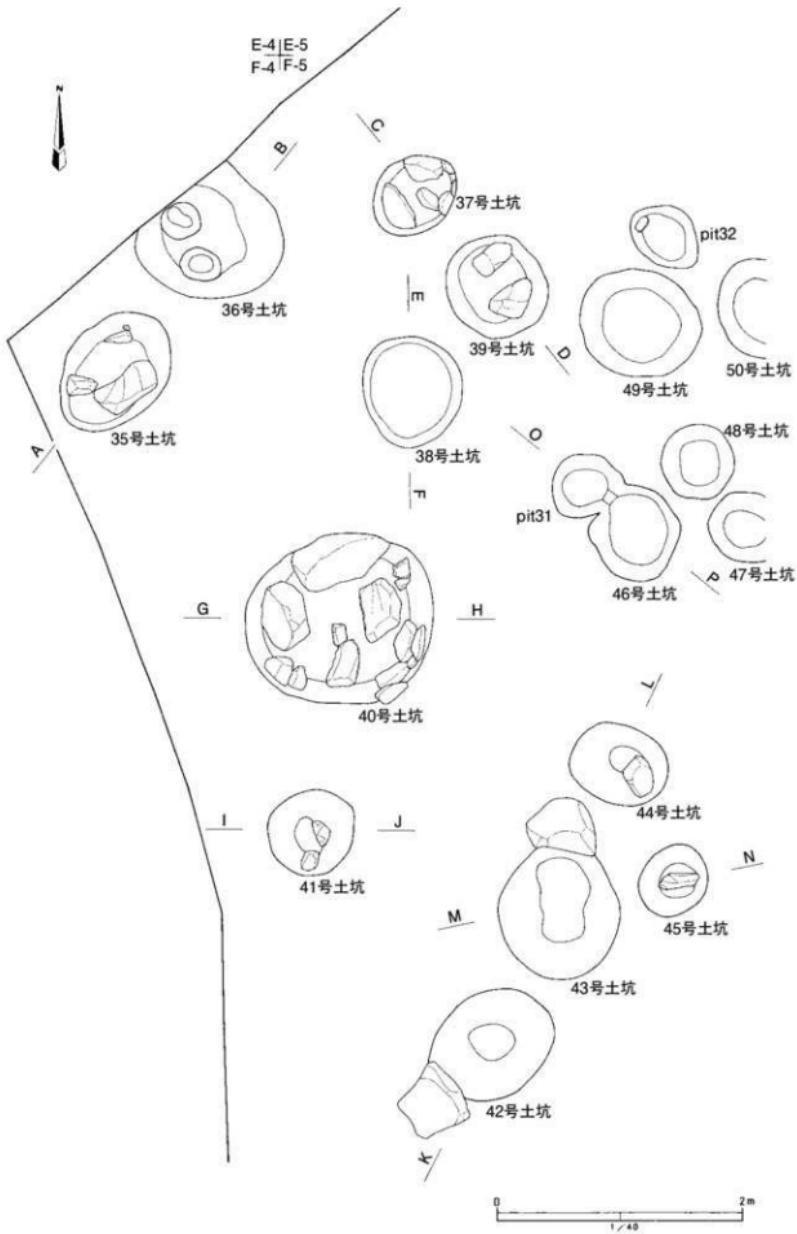
第14図 第27~29・62・63号土坑平・断面図



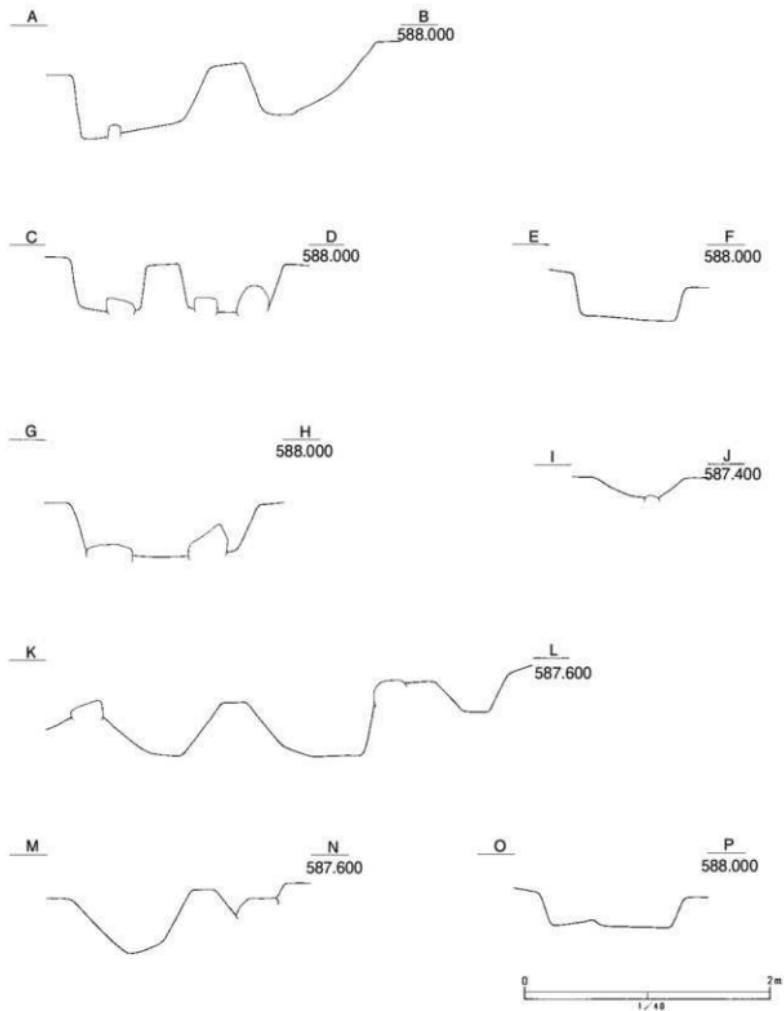
第15図 第30~34・64~71号土坑平面図



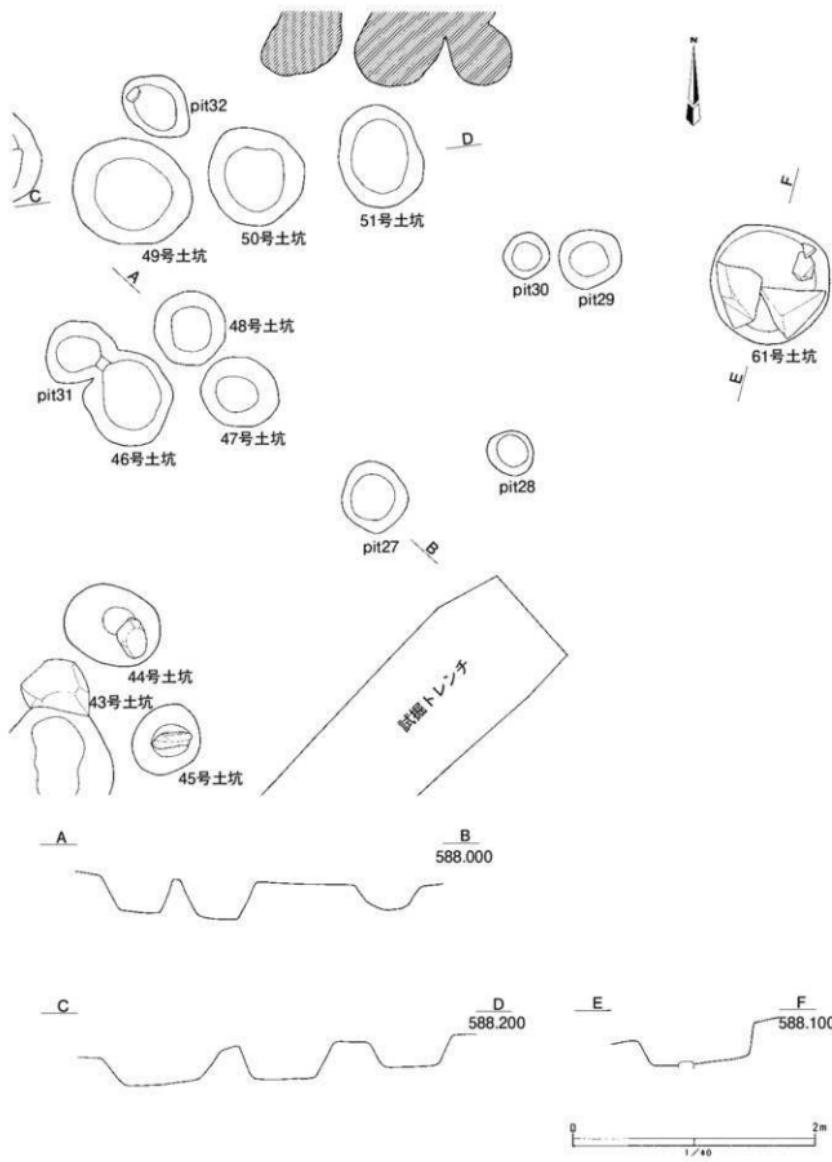
第16図 第30~34・64~71号土坑断面図



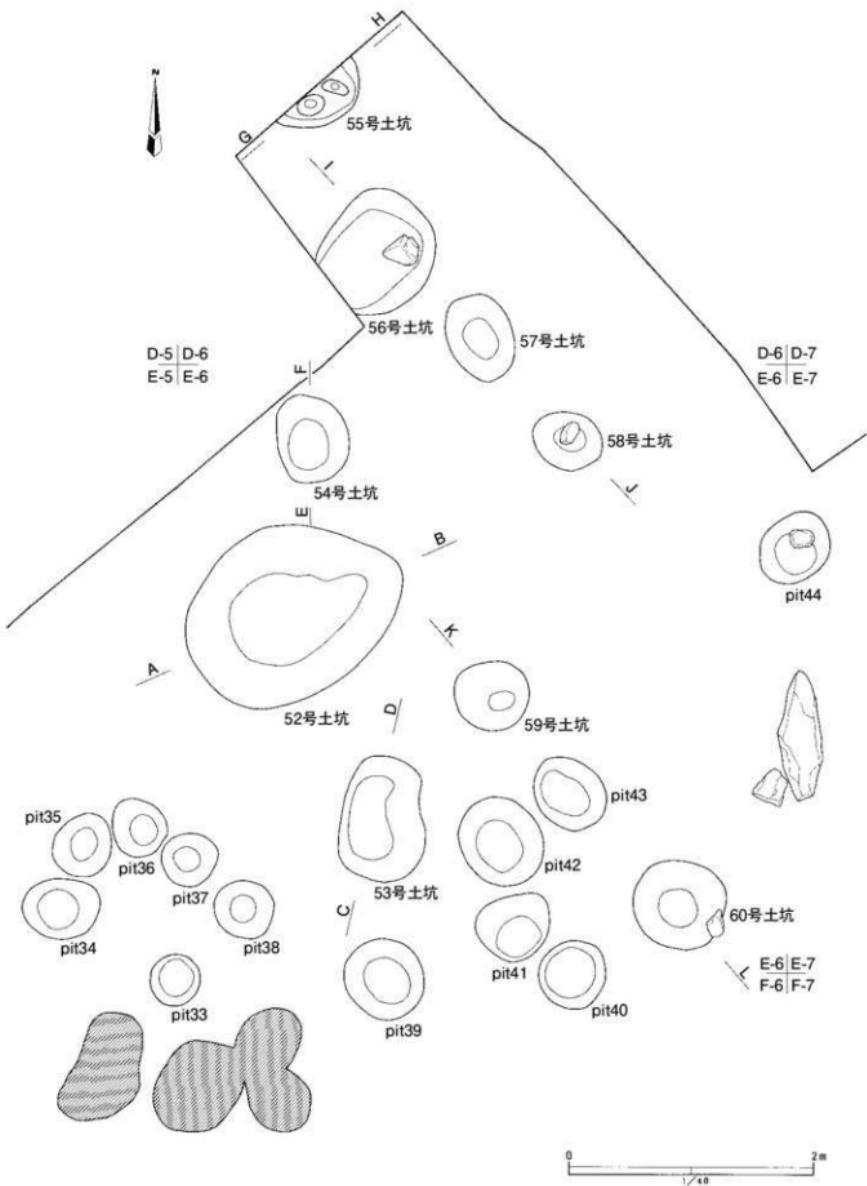
第17図 第35～46号土坑・第31号ピット平面図



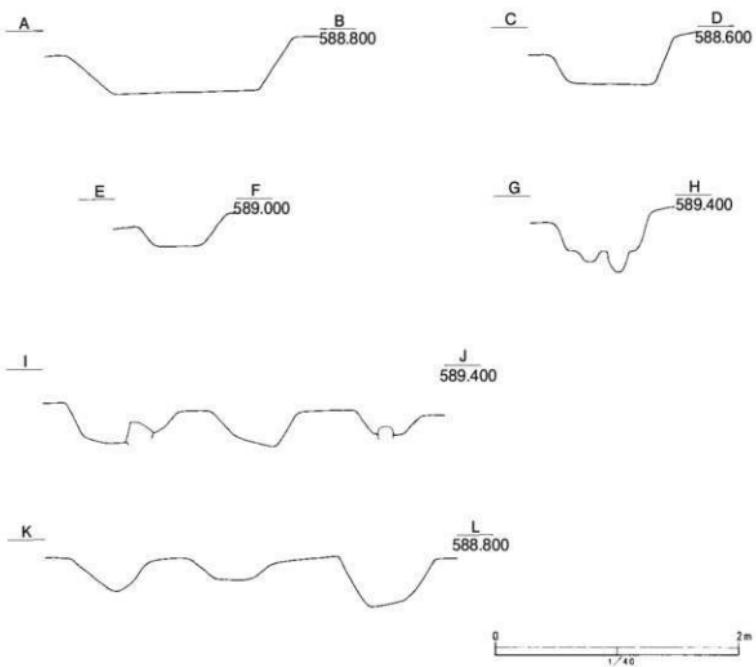
第18図 第35~46号土坑・第31号ピット断面図



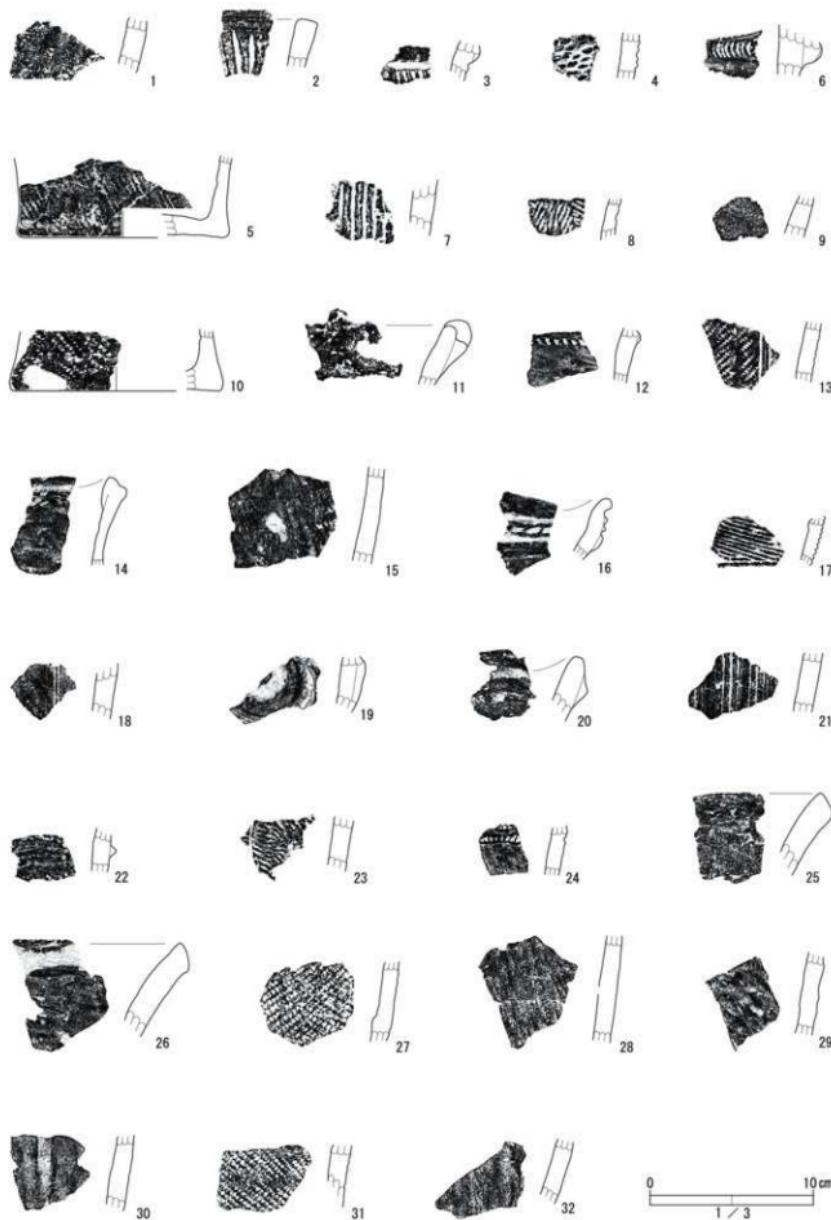
第19図 第47～51・61号土坑・第27号ピット平・断面図



第20図 第52～60号土坑・第43号ピット平面図

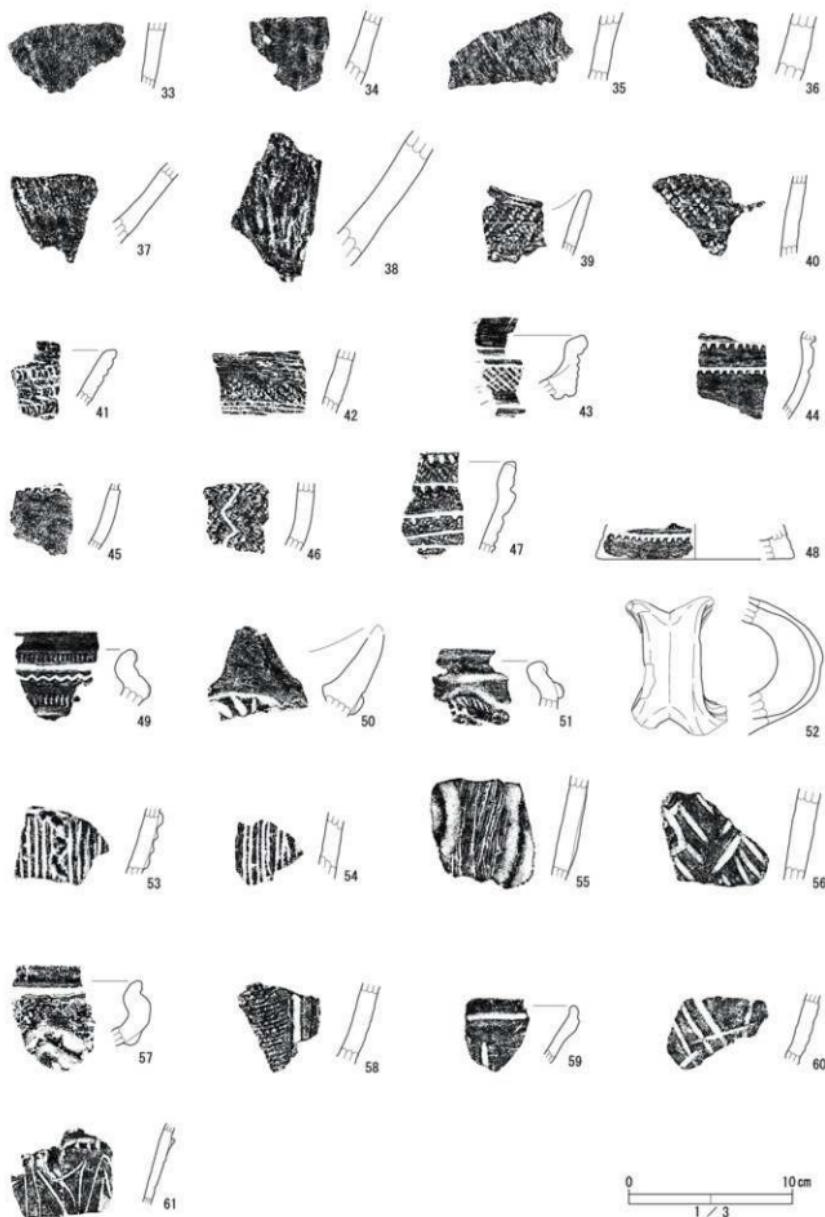


第21図 第52～60号土坑・第43号ピット断面図



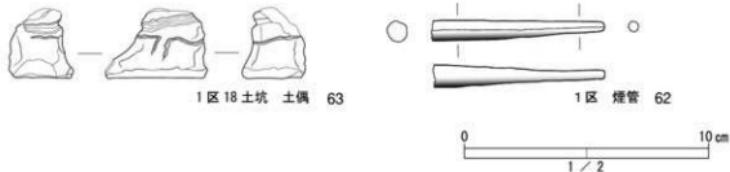
第22図 遺物実測図 (1)

第一次調査出土遺物 1

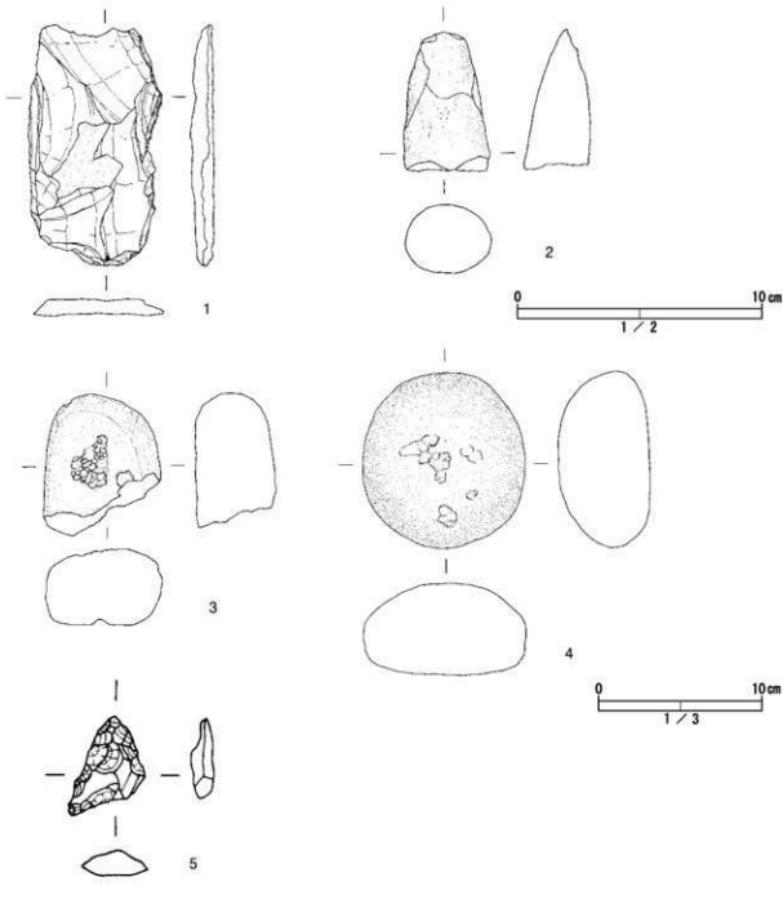


第23図 遺物実測図（2）

第一次調査出土遺物 2



第23図 遺物実測図 (3)



第24図 石器実測図

第1表 PIT一覧表

遺構名	図版番号	位置	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	参考
1号PIT	7	H-12	椭円形	57	48	28	不明	
2号PIT	7	H-12	円形	52	50	23	不明	
3号PIT	7	H-12	円形	48	45	16	不明	
4号PIT	7	H-12	椭円形	60	42	28	不明	
5号PIT	7	H-12	不整形	74	65	23	不明	
6号PIT	7	H-12	椭円形	30	24	16	不明	
7号PIT	7	H-12	椭円形	58	51	32	不明	
8号PIT	7	H-12	椭円形	52	—	30	不明	
9号PIT	7	H-12	椭円形	55	48	35	不明	
10号PIT	7	H-12	円形	49	46	26	不明	
11号PIT	7	I-12	椭円形	70	60	18	不明	
12号PIT	7	H-12	不要椭円形	54	49	26	不明	
13号PIT	7	H-12 I-12	椭円形	58	47	28	不明	
14号PIT	7	I-12	椭円形	—	38	26	不明	
15号PIT	8	H-11	円形	56	55	36	不明	
16号PIT	10	H-9	椭円形	44	35	43	不明	
17号PIT	10	H-9	椭円形	55	47	39	不明	
18号PIT	12	I-9	円形	60	58	56	不明	
19号PIT		I-5 I-6	椭円形	59	45	24	不明	
20号PIT		I-5	円形	60	53	29	不明	
21号PIT	14・15	I-6	円形	43	41	32	不明	
22号PIT		H-6	円形	41	41	29	不明	
23号PIT	15	H-6	椭円形	63	53	35	不明	
24号PIT	15	G-6 H-6	不整円形	60	55	27	不明	
25号PIT		G-6	椭円形	73	64	26	不明	
26号PIT		G-6	橢丸方形	55	54	22	不明	
27号PIT	19	F-5 E-6	不整円形	60	55	26	不明	
28号PIT	19	F-6	円形	39	36	25	不明	
29号PIT	19	F-6	円形	51	49	37	不明	
30号PIT	19	F-6	円形	39	39	36	不明	
31号PIT	17・19	F-5	不整円形	51	59	56	不明	
32号PIT	17・19	F-5	椭円形	64	48	35	不明	
33号PIT	20	E-5 F-5 F-6	椭円形	45	40	22	不明	
34号PIT	20	E-5	椭円形	65	50	32	不明	
35号PIT	20	E-5	椭円形	54	47	44	不明	
36号PIT	20	E-5	椭円形	49	45	24	不明	
37号PIT	20	E-5 E-6	円形	47	44	31	不明	
38号PIT	20	E-6	円形	49	48	26	不明	
39号PIT	20	E-6 F-6	椭円形	68	62	27	不明	
40号PIT	20	E-6 F-6	円形	56	54	37	不明	
41号PIT	20	E-6	不整円形	60	53	40	不明	
42号PIT	20	E-6	椭円形	76	65	20	不明	
43号PIT	20	E-6	椭円形	66	53	19	不明	
44号PIT	20	E-6 E-7	椭円形	52	52	22	不明	

第2表 土坑一覽表

遺構名	図版番号	位置	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時間	備考
1号土坑	7	H-12 H-13	椭円形?	100	—	48	不明	
2号土坑	7	H-12	椭円形	—	55	77	不明	
3号土坑	7	H-12	椭円形	—	54	54	縄文	
4号土坑	7	H-12	不整形	—	80	64	縄文中期	
5号土坑	8	H-11	隅丸長方形	108	83	86	不明	
6号土坑	8	H-11	椭円形	93	85	57	縄文早期 ～中期初頭	押型文 五領ヶ台式
7号土坑	8	H-11	不整形	—	—	51	縄文中期前葉	井戸式
8号土坑	8	H-11	不整形	—	—	28	縄文前期 最終末	矢羽根状文
9号土坑	8	H-11	椭円形	95	75	64	不明	
10号土坑	8	H-11	椭円形	90	68	40	不明	
11号土坑	8	H-11	椭円形	130	86	23	不明	
12号土坑	8	H-10	椭円形	99	75	25	不明	
13号土坑	8	H-10 H-11	隅丸方形	146	135	75	不明	
14号土坑	10	H-10	椭円形?	190	—	—	不明	
15号土坑	10	H-10	椭円形	71	60	85	不明	
16号土坑	10	G-10	椭円形	60	53	45	不明	
17号土坑	10	H-10	円形	69	66	55	縄文	削製石斧
18号土坑	10	H-10	椭円形	75	63	28	縄文中期初頭	五領ヶ台式 土偶脚部
19号土坑	10	H-9 H-10	椭円形	62	56	25	不明	
20号土坑	10	G-9 G-10	椭円形	66	56	45	不明	
21号土坑	10	G-9	椭円形	83	65	28	不明	
22号土坑	10	G-9	椭円形	—	75	43	不明	
23号土坑	12	I-9	椭円形	78	48	42	不明	
24号土坑	13	I-8	椭円形	90	72	52	不明	
25号土坑	13	I-7 J-7	円形	63	60	35	不明	
26号土坑	13	I-7	椭円形	64	57	51	不明	
27号土坑	13・14	I-7	椭円形	70	61	46	縄文後期前葉	壇之内式
28号土坑	13・14	I-7	隅丸形	55	52	24	不明	
29号土坑	14	I-7	椭円形	70	62	27	不明	
30号土坑	15	I-6	椭円形	92	73	37	不明	
31号土坑	15	I-6	椭円形	88	78	29	縄文後期前葉	壇之内式?
32号土坑	15	I-5	不整形	95	40	21	不明	
33号土坑	15	I-5	椭円形	65	59	25	不明	
34号土坑	15	I-5	椭円形	73	70	15	不明	
35号土坑	17	F-4	椭円形	111	81	59	縄文中期初頭 ～後期前葉	五領ヶ台式 壇之内1式
36号土坑	17	F-4 F-5	不整形	—	109	57	縄文後期前葉	壇之内1式
37号土坑	17	F-5	椭円形	77	61	45	不明	
38号土坑	17	F-5	椭円形	92	81	40	不明	
39号土坑	17	F-5	椭円形	87	80	40	不明	
40号土坑	17	F-5 G-5	椭円形	153	140	45	縄文中期初頭	五領ヶ台式
41号土坑	17	G-4 G-5	円形	71	70	16	不明	
42号土坑	17	G-5	椭円形	97	85	43	不明	
43号土坑	17・19	G-5	椭円形	105	100	51	縄文後期前葉	壇之内1式
44号土坑	17・19	G-5	椭円形	80	65	31	不明	
45号土坑	17・19	G-5	椭円形	61	55	26	縄文中期後半	曾利Ⅲ～Ⅳ式
46号土坑	17・19	F-5	不整形	78	76	22	不明	
47号土坑	17・19	F-5	椭円形	65	58	32	不明	
48号土坑	17・19	F-5	円形	62	60	31	不明	
49号土坑	17・19	F-5	椭円形	101	87	26	不明	
50号土坑	17・19	F-5	円形	83	80	30	不明	
51号土坑	19	F-5	椭円形	86	68	25	不明	
52号土坑	20	E-6	不整椭円形	185	140	46	不明	
53号土坑	20	E-6	不整形	103	72	40	不明	
54号土坑	20	E-6	椭円形	75	59	26	縄文後期前葉	壇之内1式

遺構名	図版番号	位置	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
55号土坑	20	D-6	椭円形	82	—	49	不明	
56号土坑	20	D-6	椭円形	—	89	34	不明	
57号土坑	20	D-6	椭円形	71	53	30	不明	
58号土坑	20	E-6	椭円形	59	46	20	縄文中期後半	曾利Ⅳ式
59号土坑	20	E-6	円形	61	58	28	不明	
60号土坑	20	E-6	円形	76	73	42	不明	
61号土坑	19	F-6	円形	102	101	35	不明	
62号土坑	14	H-6	円形	62	58	23	不明	
63号土坑	14	H-6	椭円形	67	58	25	不明	
64号土坑	15	G-5 H-6	椭円形	130	103	40	不明	
65号土坑	15	H-5 H-6	椭円形	130	92	56	不明	
66号土坑	15	H-6	円形	69	61	40	不明	
67号土坑	15	H-6	円形	95	81	43	不明	
68号土坑	15	H-5 H-6 I-5 I-6	椭円形	122	105	27	縄文中期後半	曾利Ⅳ式
69号土坑	15	I-5	円形	65	63	43	縄文中期初頭	五頭ヶ台式
70号土坑	15	H-5	円形	63	58	25	縄文早期	打越式
71号土坑	15	H-5 I-5	椭円形	104	60	30	不明	

第3表 土器観察表 (()は推定復元値)

図版No.	地点	種類	時期	器種	口底/高(cm)	整形技法	色調・施上	備考
22 1	3土	縄文	不明	深鉢	—/—	縄文	褐色 白色粒子・赤色粒子	
22 2	4土	縄文	縄文中	深鉢	—/—	沈線	褐色 白色粒子・赤色粒子	
22 3	4土	縄文	縄文中	深鉢	—/—	沈線 陰帯	にぶい赤褐色 白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	
22 4	6土	縄文	縄文早	深鉢	—/—	押型文	にぶい赤褐色 白色粒子・赤色粒子	押型文系土器
22 5	6土	縄文	縄文中	深鉢	— / (12.6) / —	單節縄文 結節縄文	赤褐色 白色粒子・金雲母	中期初頭五頭ヶ台式
22 6	7土	縄文	縄文中	深鉢	—/—	陰帯に爪形文	褐色 白色粒子	中期中葉井戸尻式
22 7	7土	縄文	縄文中	深鉢	—/—	継位沈線	褐色 白色粒子・石英・長石	中期中葉井戸尻式
22 8	9土	縄文	縄文前	深鉢	—/—	矢羽根状文	暗褐色 白色粒子・石英	前期終末期
22 9	10土	不明	不明	深鉢	—/—	無文	褐色 白色粒子・黒色粒子	
22 10	18土	縄文	縄文中	深鉢	— / (12.6) / —	縄文	褐色 白色粒子・金雲母・長石	中期初頭五頭ヶ台式
22 11	27土	縄文	縄文後	深鉢	—/—	貼付陰帯	黒褐色 白色粒子・金雲母・石英	後期前葉端之内式
22 12	31土	縄文	縄文後	深鉢	—/—	微陰帶に刺突穴	にぶい黄褐色 白色粒子	後期前葉端之内式?
22 13	35土	縄文	縄文中	深鉢	—/—	縄文 沈線	褐色 白色粒子	中期初頭五頭ヶ台式
22 14	35土	縄文	縄文後	深鉢	—/—	波状口縁	黒褐色 白色粒子・赤色粒子・金雲母・石英	後期前葉端之内式
22 15	35土	縄文	縄文後	深鉢	—/—	無文	にぶい褐色 白色粒子・赤色粒子・金雲母	粗製土器
22 16	36土	縄文	縄文後	深鉢	—/—	波状口縁 陰帯 刺空	明褐色 白色粒子	後期前葉端之内式
22 17	40土	縄文	縄文中	深鉢	—/—	沈線	にぶい黄褐色 白色粒子・黒色粒子・長石	中期初頭五頭ヶ台式
22 18	43土	縄文	縄文後	深鉢	—/—	沈線	にぶい黄褐色 白色粒子・黒色粒子・長石	後期前葉端之内式
22 19	45土	縄文	縄文中	深鉢	—/—	陰帯	にぶい黄褐色 白色粒子・赤色粒子	中期後半曾利Ⅲ~IV式
22 20	54土	縄文	縄文後	深鉢	—/—	波状口縁 陰帯	にぶい褐色 白色粒子・赤色粒子・金雲母	後期前葉端之内式
22 21	58土	縄文	縄文中	深鉢	—/—	条線	にぶい褐色 白色粒子・赤色粒子	中期後半曾利Ⅳ式

層級	No.	地點	種別	時期	器種	口/底/高 (cm)	整形技法	色調・胎土	備考
22	22	68土	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	隆蒂	にぶい黄褐色 白色粒子・赤色粒子・黑色粒子	中期後半曾利IV式
22	23	69土	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	縄文 沈線	明褐色 白色粒子・赤色粒子・黑色粒子・石英	中期初頭五頭ヶ台式
22	24	70土	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	貝型腹縁文	にぶい赤褐色 白色粒子	早明打越式
22	25	I-6	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	無文	にぶい褐色 白色粒子・赤色粒子	早期古屋敷遺跡第IV群土器
22	26	I-7	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	無文	にぶい黄褐色 白色粒子・赤色粒子・黑色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第IV群土器
22	27	C-5	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	羽状縄文	にぶい橙色 白色粒子・石英	早期古屋敷遺跡第IV群土器
22	28	2区	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	無文	にぶい橙色 白色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第IV群土器
22	29	C-5	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	無文	暗褐色 白色粒子	早期古屋敷遺跡第IV群土器
22	30	2区	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	無文	にぶい黄褐色 白色粒子・黑色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第IV群土器
22	31	C-3	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	單踏縄文	褐色 白色粒子・黑色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第IV群土器
22	32	2区	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	無文	にぶい褐色 白色粒子・黑色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第IV群土器
23	33	C-5	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	無文	にぶい褐色 白色粒子・赤色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第IV群土器
23	34	2区	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	無文	褐色 白色粒子・金雲母・石英・長石	早期古屋敷遺跡第IV群土器
23	35	2区表土	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	無文	褐色 白色粒子・赤色粒子・金雲母・長石	早期古屋敷遺跡第IV群土器
23	36	I-6	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	無文	にぶい褐色 白色粒子・金雲母	早期古屋敷遺跡第IV群土器
23	37	2区表土	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	無文	にぶい黄褐色 白色粒子・赤色粒子・雲母	早期古屋敷遺跡第IV群土器
23	38	I-7	縄文	縄文早	尖底 深鉢	-/-/-	無文	にぶい黄褐色 白色粒子・金雲母・石英	早期古屋敷遺跡第IV群土器
23	39	1区	縄文	縄文前	深鉢	-/-/-	波狀口縁 縄文	にぶい褐色 白色粒子	前期帆遊堂Z3式
23	40	1区	縄文	縄文前	深鉢	-/-/-	縄文	暗灰黄色 白色粒子・石英	前期帆遊堂Z3式
23	41	1区	縄文	縄文前	深鉢	-/-/-	爪形文	橙色 白色粒子・石英	前期後半諸磯ヒ式
23	42	I-5	縄文	縄文前	深鉢	-/-/-	縄文 沈線	にぶい褐色 白色粒子・黑色粒子・石英・長石	前期後半諸磯ヒ式
23	43	1区	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	沈線 格子目文	褐色 白色粒子・黑色粒子・石英・金雲母	中期初頭五頭ヶ台1式
23	44	H-11	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	隆蒂 沈線 刺突文	褐色 白色粒子・金雲母	中期初頭五頭ヶ台式
23	45	H-11	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	沈線 刺突文	褐色 白色粒子・金雲母	中期初頭五頭ヶ台式
23	46	H-11	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	波狀沈線 縄文	褐色 白色粒子・黑色粒子	中期初頭五頭ヶ台式
23	47	1区	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	口唇部にきざみ 沈線 縄文 刺突文	にぶい赤褐色 白色粒子・石英・金雲母	中期初頭五頭ヶ台式
23	48	1区	縄文	縄文中	深鉢	-/-/(11.0)/-	沈線 刺突文	にぶい黄褐色 白色粒子・金雲母	中期初頭五頭ヶ台式
23	49	1区	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	爪形文 波狀沈線	橙色 白色粒子	中期中葉井戸内式
23	50	1区	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	波狀口縁 隆蒂にきざみ	にぶい褐色 白色粒子・黑色粒子・長石	中期中葉井戸内式
23	51	2区表土	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	隆蒂にきざみ	にぶい赤褐色 白色粒子・黑色粒子	中期中葉井戸内式
23	52	1区	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	X字状把手	褐色 白色粒子・黑色粒子	中期後半曾利II式
23	53	H-10	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	縦位沈線 波狀隆蒂	にぶい褐色 白色粒子・黑色粒子	中期後半曾利II式
23	54	G-11	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	縦位条線	にぶい褐色 白色粒子・黑色粒子・長石	中期後半曾利III式
23	55	1区表土	縄文	縄文中	深鉢	-/-/-	隆蒂 条線	黃褐色 白色粒子・赤色粒子・石英	中期後半曾利IV式

図版No.	地点	種別	時期	器種	口底/高 (cm)	整形技法	色調・胎土	備考
23 56	I区	绳文	绳文中	深鉢	—/—/—	ハの字型 沈縫	暗灰黄色 白色粒子・赤色粒子・金雲母・長石	中期後半曾利V式
23 57	I区	绳文	绳文中	深鉢	—/—/—	降帯 綱文	に京い褐色 白色粒子・石英・長石	中期後半加曾利E式
23 58	I区	绳文	绳文中	深鉢	—/—/—	绳文 沈縫	に京い褐色 白色粒子・赤色粒子・長石	中期後半加曾利E式
23 59	I区	绳文	绳文後	深鉢	—/—/—	沈縫	明褐色 白色粒子・黑色粒子・長石	後期前葉坂之内1式
23 60	I区	绳文	绳文後	深鉢	—/—/—	沈縫	明黄褐色 白色粒子・黑色粒子・長石	後期前葉坂之内1式
23 61	B-4	绳文	绳文後	深鉢	—/—/—	降带上にきざみ 沈縫	黒褐色 白色粒子・金雲母	後期前葉坂之内2式

第4表 石器・土製品等觀察表 (()) は推定復元値)

図版No.	地点	分類	長/幅/厚 (cm)	重さ (g)	石材	色 調	備考
24 1	H-6	打製石斧	10.05/5.5/9.5	62.5	粘板岩		
24 2	17土坑	磨製石斧	—/3.54/—	89			
24 3	C-5 (4区一番南)一括	磨石凹石	(8.7)/7.3/5.0	394.3			
24 4	H-12	凹石	10.8/10.0/5.0	859.8			
24 5	1-9	石鑿	2.04/1.48/0.51	0.9	黑曜石		
23 62	I区一括	煙管・吸口	長さ7.1 直径0.8	26.2			
23 63	I区18土	土偶	2.9/2.6/4.2	26.2		明赤褐色 白色粒子・黑色粒子・長石	绳文中期 脚部

第4章 平成22年度調査の成果

第1節 調査の方法と基本層序

第1項 調査の方法

工事用道路建設に伴い行われた第2次調査は、第1次調査区域I区～IV区に隣接することから、続けてV区と調査区域を設定し行われた。調査面積は350m²である。

調査の方法は、果樹の抜根後重機により表土を除去することから始め、第1次調査時に設定された一辺5mのグリッドをもとに設定した（第2図・第25図）。座標値については、E-12グリッドでX=-43925m（南北）、Y=19200m（東西）となっている。標高は、調査区外側の2カ所に任意にベンチマークを設定し、E-9グリッド内で59150m、G-14グリッド内で59170mを測る。

その後、人力による掘り下げ、精査、及び遺構・遺物の検出、記録を行い、全体が面的に掘り上がった状態でラジコンヘリにより鳥瞰及び俯瞰写真撮影を行った。

第2項 基本層序

V区はほぼ東西方向に沿って設定された調査区であるが、調査区北側の一帯は果樹畠（桃）が階段状に広がっている（写真図版参照）。V区は、北側からちょうど一段下がった土地区画になっているが、本来は現地表から數10cmの高さをもちらがら斜面を形成し、南側のI区・II区へと続いていると見られる。

したがって、厚さ30cmほどの表土層（1層）を除去すると、ほどなく縄文時代中期を中心とした遺物包含層である暗褐色土（2層）および2層よりややしまった暗褐色土（3層）になる（第25図）。さらに、調査区の中央から西側では3層ではなく、浅いところで1層直下、調査区の西端でも1層・2層合わせて現地表下約50cmほどで地山のローム層（10層）が、花崗岩の巨礫を伴って確認された。この礫は、山体斜面の崩壊に伴うものと考えられ、北東から南西に向かって帶状に続いており、II区においても確認されている。

2・3層の暗褐色土中からは、縄文時代中期中葉から後期初頭にかけての土器片と石器がわずかに出土しているが、調査区南西隅では中世の内耳土器片も出土している。

一方、調査区の東側は、東西に幅7～10m、南北に長さ10mにわたって浅く谷状に落ち込んだ地形となっており、この部分において9層の土層の堆積が確認された。地表下約1mから、50cmほどの厚さで堅くしまった黒褐色土・黒色土が堆積しており（4～9層）、これらの土層中から縄文時代早期から前期にかけての土器片や黒曜石製・チャート製の石器などが出土するとともに、集石土坑が発見されており、当該時期のある段階は生活面であったことが考えられる。

第2節 発見された遺構と遺物

第1項 集石土坑

上記のとおり、V区では調査区東側の谷部において縄文時代の集石土坑2基が発見された。いずれも4層～8層にかけての黒色土・黒褐色土に掘り込まれている。一方、谷部から西側の調査区は、縄文時代中期の土器片と石器がわずかに出土したのみで、遺構は確認されなかった。

1号集石土坑（第27図）

F-12グリッドのほぼ中央、谷部の西側斜面上に位置する。直径は東西で1m、南北で1.1mの不整円形で、深さ35cmの断面形がボール状の土坑に数cm～18cm大ほどの礫が充填されており、底面には20cm四方ほどの扁平な礫が2点敷かれていた。焼土は見られなかったが、炭化材の小片がわずかに確認され、礫は熱を受けているものが多く、割れているものも見られた。土坑内からの出土遺物はなかったが、東側の壁面からは炭化材がまとめて出土して

いる。この分析結果については付編1に詳しく記載してあるが、AMSによる年代測定の結果では、炭化材からは縄文時代前期後葉頃の年代値が得られており、これは周囲から出土した土器片の年代観よりも新しいものである。

2号集石土坑（第27図）

G-13グリッドの北西コーナーからG-12グリッドにかかり、谷部の底から東側斜面上に位置する。確認面は1号集石土坑よりやや低く、掘り込みも皿状で浅い。平面規模も1号集石土坑よりやや小さく、直径80cm、深さ10cmほどの円形の土坑であったが、1号集石土坑よりやや大きめの5~20cm大ほどの蝶が充填されており、被熱痕が見られた。この土坑内からも出土遺物はなく、周辺からも出土はほとんどないが、1号集石土坑と同時期のものであろう。

第2項 出土遺物

第2次調査では、出土した遺物については全点を記録し取り上げたところ、谷部を中心に土器片が204点、原石や石核・洞片等を含む石器31点が出土したが（第26図）、これらのうち土器111点、石器6点の計117点について実測を行った（第28~31図）。

出土した縄文土器片は、早期中頃から後半にかけての押型文土器と、野島式土器に併行する富士吉田市古屋敷遺跡早期第IV群のものが中心であり、条痕文系土器も含まれていた。特に、F-12グリッドの1号集石土坑周辺からG-12グリッドにかけてかなりまとまって出土している。詳細は観察表（第5・6表）に記載してあるが、ここでは主なものについて概観しておく。

1~26は押型文土器で、1~9は山形押型文土器、10~26は楕円押型文土器である。27~34は条痕文系土器で、31~34は表裏条痕が確認でき、胎土に纖維を含む。35~96は古屋敷遺跡早期第IV群土器に対比できるもので、36~56は縄文を施したもの、57~65は縄文に沈線文・刺突文の見られるもの、67~96は無文のものである。66は鶴ヶ島台式に比定される。いずれも胎土に纖維や金色の雲母を含むものが多い。なお、57と75の外側には圧痕があり、この同定結果については付編2に記載してある。97・98は浅鉢で、特に97の出土した層位は8層から9層にかけてであるが、集石土坑も含め上層から遺構が掘り込まれていた可能性がある。赤彩が施されており、口縁部に孔列は確認できないが、内湾する形態であることから、集石土坑の年代を考慮して前期諸磧b式段階のものとしておきたい。ただし、焼成前の赤彩とみられ、今後型式を含め、系譜には検討を要する。99~110については、表土下の暗褐色土中から出土したものである。時期不明なものもあるが、縄文中期を中心としたもので、101は北陸新崎式の系譜をもつもの、103~109は曾利式、110は後期称名寺式のものである。また、111は中世の内耳土器片である。

石器（112~117）について、114はチャート製、他は黒曜石製である。

第4節まとめ

第2次調査では、設定された調査区のうち実質的な調査は東側半分であり、発見された遺構も集石土坑2基のみであったが、浅い谷部が埋没する過程で、縄文時代早期後半から前期にかけての生活面が存在したことが確認できた。それはまた、周辺に当該期の生活址の中心が存在する可能性を示唆しているものであろう。

谷部から出土した土器は、いずれも破片資料であったが、既に述べてきたように縄文早期野島式土器併行期の在地の土器「古屋敷遺跡早期第IV群土器」を中心とするものであり、第1次調査の資料と合わせて当該期の新たな資料を提供するとともに、今後甲府盆地内でのさらなる増加を予測させるものである。

また、1号集石土坑内から出土した炭化材のAMS年代測定では、縄文時代前期後葉頃を示す年代値が得られている。これは、当初想定されていた年代より新しいものであるが、集石土坑が確認された面と、実際に掘り込まれた面を考慮すれば、周辺から出土した早期土器とも矛盾はないものと思われる。一方では、ダイズ属の植物圧痕土器が発見されたことにより、縄文時代早期から前期にかけての植物利用の様相が新たな視点で確認された意義は大

きいものといえる。今後の研究がさらに期待される。

今回の第1次・第2次調査において、御坂中丸遺跡の範囲の南西端の調査が行われたことになるが、第1次調査と同様に縄文時代早期の土器片が出土したことは、御坂峠を介した甲府盆地と郡内地域との交流をうかがわせるとともに、この地域が後の古代官道へつながる一帯であったことが想定される。

参考文献

阿部芳郎 1990 「古屋敷遺跡発掘調査報告書」富士吉田市史編纂室・古屋敷遺跡発掘調査団

阿部芳郎・堀内真 1998 「第2章 発見された市内の遺跡 第2節 古屋敷遺跡」「富士吉田市史」資料編第1巻自然・考古 富士吉田市

小野正文 1999 「2 縄文時代の編年（3）早期」「山梨県史」資料編2 原始・古代2 山梨県

松田光太郎 1998 「東関東における縄文前期後半の浅鉢形土器に関する考察－浮島・興津式土器に属する浅鉢形土器を対象として－」「神奈川考古」第34号 神奈川考古同人会

第5表 V区出土土器観察表（色調名は農林水産省技術会議事務局監修 1998「新版標準土色帖」21版による）

順番	No.	出土地点	注記No.	種別	時期	型種	口径/高 (mm)	文様・調整	色調	胎土	備考
28	1	F-12	P161	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	赤褐色 2.5YR4/8	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	2	F-12	P172	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	明褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	3	F-12	P104	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	明褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	4	F-12	P200	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	にじ・赤褐色 5YR4/4	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	5	F-12	P224	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	にじ・赤褐色 5YR4/4	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	6	E-12	P39	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	7	G-12	P128	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	8	F-12	P170	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	9	F-12	P74	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	山形押型文	赤褐色 5YR4/8	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	10	E-13	P63	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	押型文土器
28	11	F-13	P81	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明褐色 2.5YR5/6	白色粒子	押型文土器
28	12	G-12	P218	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明褐色 5YR5/6	白色粒子	押型文土器
28	13	E-12	P194	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	にじ・赤褐色 5YR5/4	白色粒子・金色 雲母	押型文土器
28	14	F-12	P201	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子	押型文土器
28	15	E-12	P195	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	押型文土器
28	16	E-12	P67	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明褐色 5YR5/6	白色粒子	押型文土器
28	17	F-12	P178	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明褐色 2.5YR5/6	白色粒子・黒色 粒子・金色雲母	押型文土器
28	18	F-12	P164	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明褐色 2.5YR5/6	白色粒子・黒色 粒子	押型文土器
28	19	F-12	P180	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	押型文土器
28	20	F-12	P173	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	明褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	21	G-12	P237	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子・赤色 粒子・金色雲母	押型文土器
28	22	E-12	P146	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—/—	楕円押型文	赤褐色 2.5YR4/6	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器

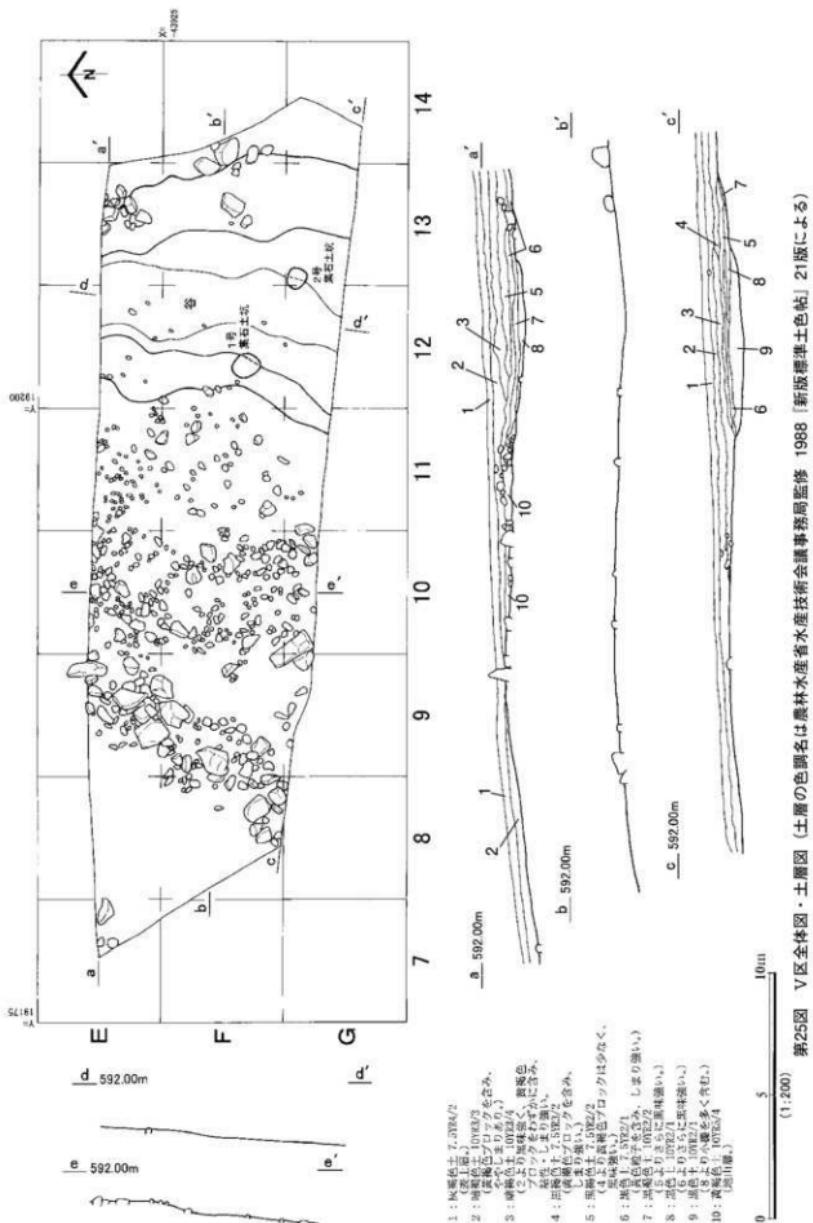
回収No.	出土地点	記号No.	種別	時期	器種	口径/底径 (cm)	文様・調整	色調	胎土	備考	
28	23	F-12	P238	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—	楕円押型文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	24	F-12	P197	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—	楕円押型文	赤褐色 2.5YR4/8	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	25	G-13	P4	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—	楕円押型文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	26	G-12	P228	縄文土器	縄文早期中葉	深鉢	—/—	大粒の楕円 押型文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色 粒子	押型文土器
28	27	G-11	P214	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—	条痕文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	条痕文系土器
28	28	G-11	P212	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—	条痕文	褐色 10YR4/4	白色粒子・金色 雲母	条痕文系土器
28	29	F-14	P1	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—	条痕文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	条痕文系土器
28	30	E-12	P41	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—	条痕文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	条痕文系土器
28	31	E-12	P53	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—	表裏条痕文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	条痕文系土器
28	32	F-12	P92	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—	表裏条痕文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	条痕文系土器
28	33	F-12	P29	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—	表裏条痕文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	条痕文系土器
28	34	G-12	P221	縄文土器	縄文早期後葉	深鉢	—/—	表裏条痕文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	条痕文系土器
29	35	F-12	P80	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	褐色 10YR4/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	36	G-12	P130	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	に、い赤褐色 5YR4/4	白色粒子・黑色粉 ・金色雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	37	F-12	P126	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	明褐色 7.5YR5/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	38	G-11	P113	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	褐色 7.5YR4/4	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	39	G-12	P236	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	褐色 10YR4/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	40	G-12	P222	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	暗赤褐色 5YR3/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	41	F-12	P156	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	オーリーパ褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	42	G-12	P151	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文・内面 に炭化付着	暗褐色 7.5YR3/3	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	43	E-12	P50	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	黄褐色 10YR5/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	44	G-12	P149	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	明褐色 7.5YR5/6	白色粒子・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	45	F-12	P22	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	46	G-12	P132	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	褐色 10YR4/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	47	E-12	P145	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・黑色粉 ・金色雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	48	F-12	P79	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	49	F-11	P101	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・黑色粉 ・金色雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	50	G-13	P192	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	51	F-12	P140	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	52	G-12	P217	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	明褐色 7.5YR5/8	白色粒子・黑色 粒子・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	53	E-12	P54	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	明褐色 7.5YR5/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	54	F-12	P157	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	55	E-12	P47	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母・鐵錫	古層散遺跡早期 第IV群土器
29	56	F-12	P31	縄文土器	縄文早期後葉	尖底 深鉢	—/—	単節縄文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・黑色 粒子・金色雲母	古層散遺跡早期 第IV群土器

層號	No.	出土地點	法號No.	種別	時期	器種	口/底/高 (cm)	文様・調整	色調	胎土	備考
29	57	G-12	P216	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	単面文、浅鉢 外面部有壓痕	褐色 10YR4/4	白色粒子・金色 雲母	古層敷過跡早期 IV群土器 分析No.NK001
29	58	F-12	P205	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	単節縄文、 沈線文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	古層敷過跡早期 IV群土器
29	59	E-12 F-12	P91-144 204-206	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	単節縄文、次 類文、斜文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	古層敷過跡早期 IV群土器
29	60	G-12	P220	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	刺突文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	古層敷過跡早期 IV群土器
29	61	F-13	P138	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	刺突文、内 面柔痕文	褐色 10YR4/6	白色粒子	古層敷過跡早期 IV群土器
29	62	F-12	P185	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	刺突文、浅 縄文、内面柔痕文	褐色 10YR4/6	白色粒子	古層敷過跡早期 IV群土器
29	63	E-13	P64	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	刺突文、沈 線文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子	古層敷過跡早期 IV群土器
29	64	F-12	P143	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	刺突文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	古層敷過跡早期 IV群土器
29	65	F-12	P135	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	単節縄文、 沈線文	褐色 7.5YR4/4	白色粒子・金色 雲母	古層敷過跡早期 IV群土器
29	66	F-12	P225	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	沈線文、竹 管文	褐色 7.5YR4/6	白色粒子・金色 雲母	古層・台式
30	67	G-13	P137	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい赤褐色 2.5YR4/3	白色粒子・金色 雲母・纏繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	68	F-12	P166	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	赤褐色 5YR4/4	白色粒子・黑色 粒子・金色雲母	古層敷過跡早期 IV群土器
30	69	F-12	P183	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	明赤褐色 5YR5/6	白色粒子・黑色 粒子・金色母母・纏 繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	70	G-12	P153	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい・相色 7.5YR5/3	白色粒子・黑色 粒子・金色雲母	古層敷過跡早期 IV群土器
30	71	F-12	P174	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	赤褐色 5YR4/8	白色粒子・黑色 粒子・金色母母・纏 繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	72	G-12	P231	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色 雲母・纏繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	73	E-12	P40	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・黑色 粒子・金色雲母	古層敷過跡早期 IV群土器
30	74	F-12	P21	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい・相色 7.5YR6/4	白色粒子・金色 雲母・纏繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	75	F-12	P35	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文、外 に压痕	にぶい・褐色 7.5YR4/2	白色粒子・黑色 粒子・金色母母・纏 繩	古層敷過跡早期 IV群土器 分析No.NK002
30	76	G-11	P117	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	粉紅 2.5YR6/8	白色粒子・黑色 粒子	古層敷過跡早期 IV群土器
30	77	E-12	P52	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色 雲母・纏繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	78	E-12	P56	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい・赤褐色 5YR4/3	白色粒子・金色 雲母・纏繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	79	G-12	P235	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい・赤褐色 5YR5/4	白色粒子・黑色 粒子・金色母母・纏 繩	古層敷過跡早期 IV群土器 分析No.NK001
30	80	E-13	P62	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい・赤褐色 5YR5/4	白色粒子・黑色 粒子・金色母母・纏 繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	81	E-12	P55	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	明赤褐色 5YR5/6	白色粒子・黑色 粒子・金色母母・纏 繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	82	E-13	P65	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色 雲母・纏繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	83	G-11	P240	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい・赤褐色 5YR5/4	白色粒子・金色 雲母・纏繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	84	F-12	P241	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい・赤褐色 5YR4/3	白色粒子・黑色 粒子・金色母母・纏 繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	85	E-12	P58	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	粉紅 5YR6/6	白色粒子・金色 雲母・纏繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	86	F-12	P177	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい・赤褐色 5YR4/4	白色粒子・黑色 粒子・金色母母・纏 繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	87	G-11	P112	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい・赤褐色 5YR5/4	白色粒子・金色 雲母・纏繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	88	F-12	P202	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい・赤褐色 5YR5/4	白色粒子・金色 雲母・纏繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	89	G-12	P242	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい・相色 5YR4/3	白色粒子・金色 雲母・纏繩	古層敷過跡早期 IV群土器
30	90	F-12	P176	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい・相色 7.5YR5/4	白色粒子・纏繩	古層敷過跡早期 IV群土器

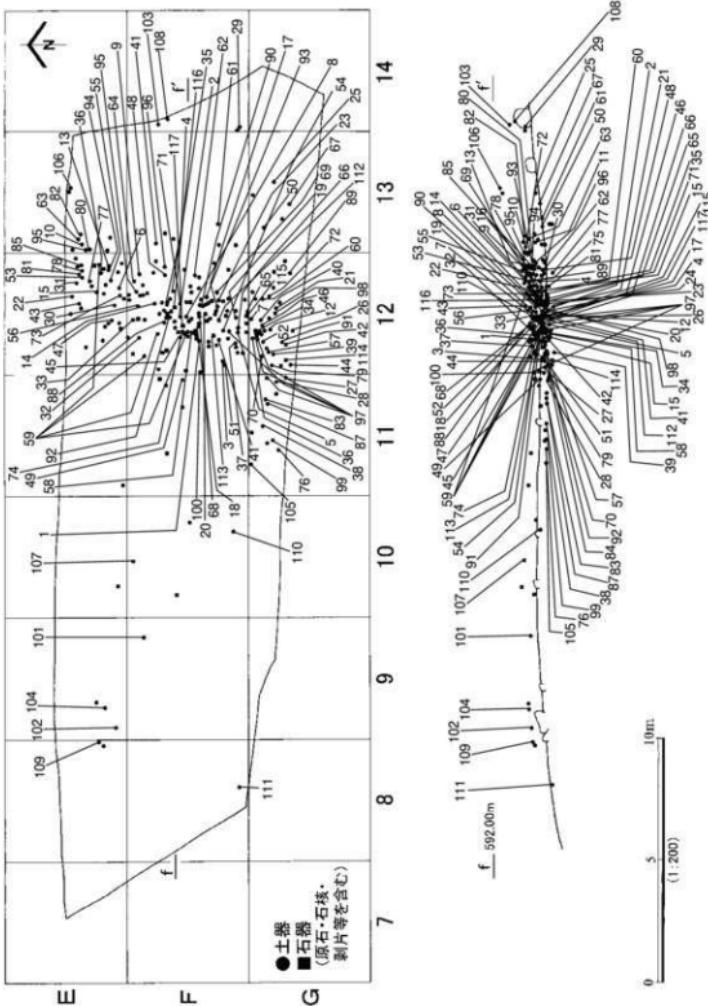
回収No.	出土地点	注記No.	種別	時期	器種	口/底/高 (cm)	文様・調整	色調	胎土	備考
30 91	G-12	P152	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい赤褐色 5YR4/4	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・鐵錫	古窯敷遺跡早期 第IV群土器
30 92	F-12	P142	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子・金色雲母	古窯敷遺跡早期 第IV群土器
30 93	F-12	P208	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	明赤褐色 5YR5/6	白色粒子・金色雲母	古窯敷遺跡早期 第IV群土器
30 94	E-12	P69	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい赤褐色 5YR5/6	白色粒子・金色雲母・鐵錫	古窯敷遺跡早期 第IV群土器
30 95	E-13	P61	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	明赤褐色 5YR5/6	白色粒子・金色雲母・鐵錫	古窯敷遺跡早期 第IV群土器
30 96	F-12	P78	縄文土器	縄文早期後葉	尖底深鉢	-/-/-	無文	にぶい赤褐色 5YR4/4	白色粒子・黒色粒子・金色雲母・鐵錫	古窯敷遺跡早期 第IV群土器
31 97	F-12・ G-11・ 12	P129・ 141・ 148・ 154・ 213	縄文土器	縄文前期後葉	浅鉢	22.0/-/-	外・内面ともミガキ・赤彩	赤褐色 2.5YR4/8	白色粒子	諸磯b式、反転実測
31 98	G-12	P134	縄文土器	縄文前期後葉	浅鉢	-/-/-	単節縄文、 外面赤彩	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・金色雲母	諸磯b式
31 99	G-11	P116	縄文土器	縄文中期初頭か	深鉢	-/-/-		にぶい赤褐色 2.5YR4/4	金色雲母	
31 100	F-12	P103	縄文土器	縄文中期初頭か	深鉢	-/-/-	沈線文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・赤色粒子	
31 101	F-9	P196	縄文土器	縄文中期初頭	深鉢	-/-/-	薄草文	暗赤褐色 2.5YR3/4	白色粒子・金色雲母	新崎式系
31 102	E-9	P120	縄文土器	縄文中期中盤か	深鉢	-/-/-	陰帯	にぶい褐色 7.5YR5/4	白色粒子	
31 103	F-14	P84	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	-/-/-		にぶい褐色 7.5YR5/4	白色粒子・黒色粒子	曾利II式
31 104	E-9	P121	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	-/-/-	条線文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子・金色雲母	曾利III式
31 105	G-11	P118	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	-/-/-	渦巻文、刺穴文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子	曾利III式
31 106	E-13	P86	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	-/-/-	条線文	赤褐色 5YR4/6	白色粒子	曾利III式
31 107	F-10	P108	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	-/-/-	条線文	明赤褐色 5YR5/6	白色粒子	曾利III式
31 108	F-14	P85	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	-/-/-	渦巻文、茎 線文	にぶい赤褐色 7.5YR5/4	白色粒子	曾利III式
31 109	E-8	P123	縄文土器	縄文中期後葉	深鉢	-/9.4/-		橙色 5YR6/6	白色粒子・金色雲母	曾利III式、反転 実測
31 110	F-10	P111	縄文土器	縄文後期初頭	深鉢	-/-/-	縄文、沈線文	明赤褐色 2.5YR5/6	白色粒子	称名寺I式
31 111	E-8	P125	土師質土器	戰国時代	内耳 土器	-/-/-	外・内面指痕 柱痕、爪形文	明赤褐色 5YR5/6	白色粒子・金色雲母	胴部下破片

第6表 V区出土石器観察表

回収No.	出土地点	注記No.	分類	長/幅/厚 (cm)	重さ (g)	石材	時期	備考
31 112	F-12	S19	石獅	1.2/1.2/0.2	0.2	黒曜石	縄文早期～前期	
31 113	F-12	S158	石獅	1.4/1.2/0.5	0.5	黒曜石	縄文早期～前期	
31 114	G-12	S215	石獅	1.6/1.2/0.2	0.4	チャート	縄文早期～前期	
31 115	F-12	S234	石獅	1.8/1.5/0.4	0.7	黒曜石	縄文早期～前期	
31 116	F-12	S198	石獅	1.7/1.4/0.4	0.7	黒曜石	縄文早期～前期	
31 117	F-12	S169	石獅	2.8/1.7/0.5	1.4	黒曜石	縄文早期～前期	

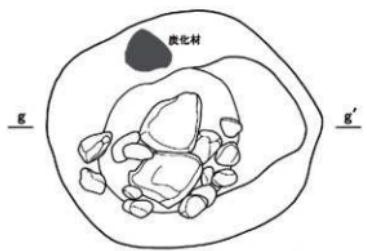
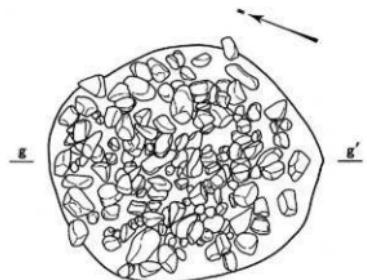


第25図 V区全図・土層図（土層の色調名は農林水産省農業技術会議事務局監修 1988「新版標準土色帖」21版による）

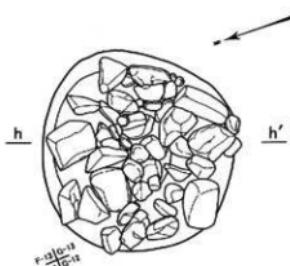


第26図 V区出土遺物分布図

1号集石土坑

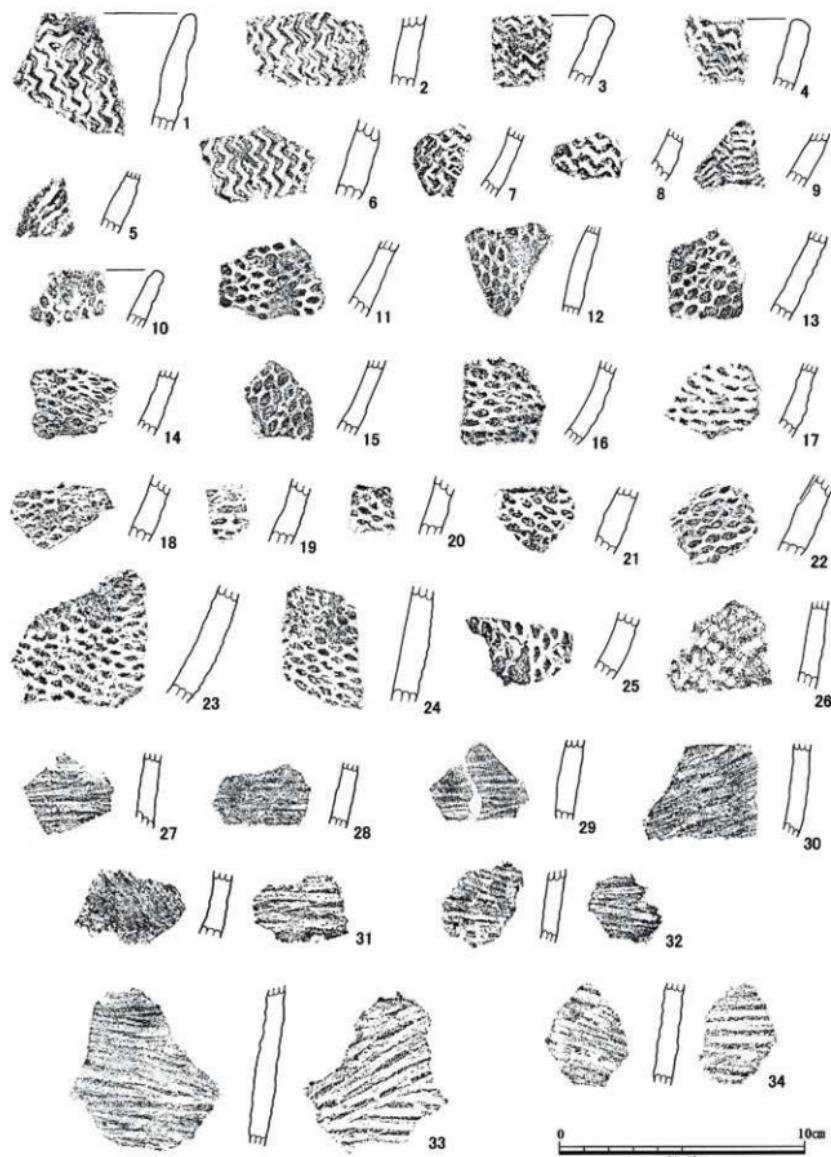


2号集石土坑

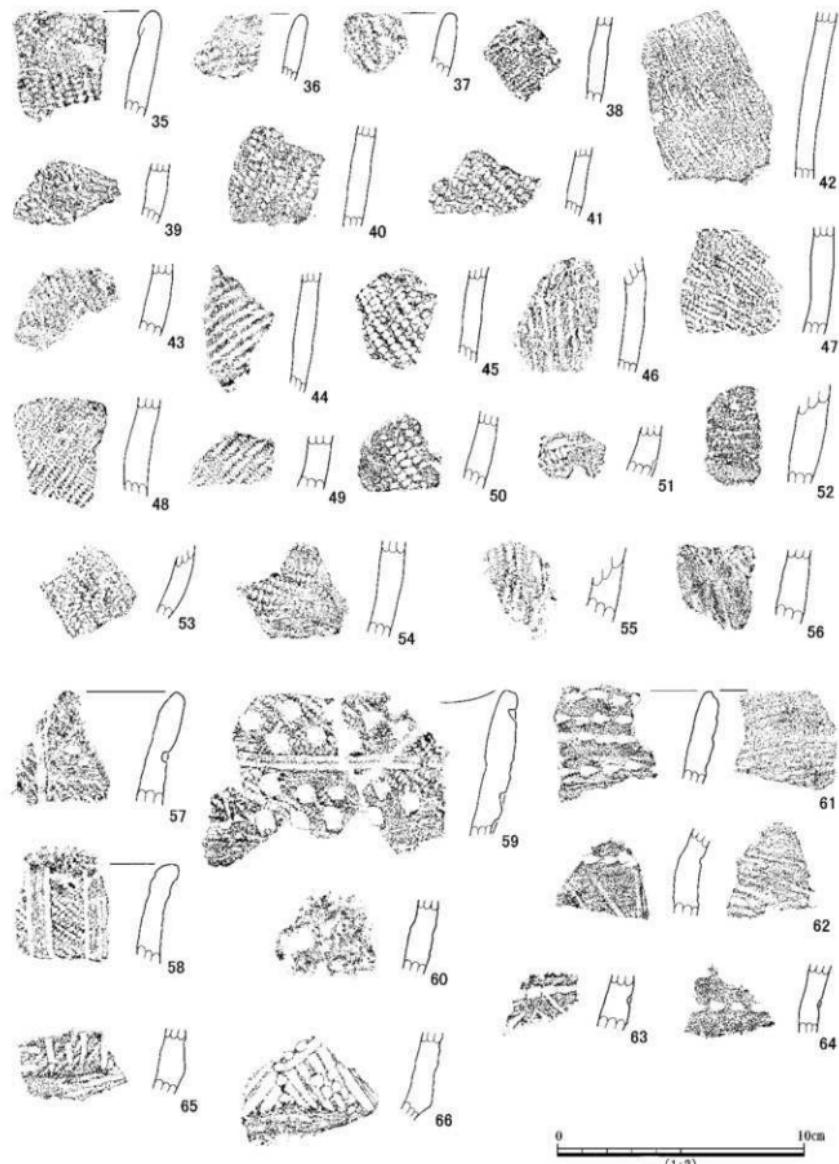


0 1m
(1:20)

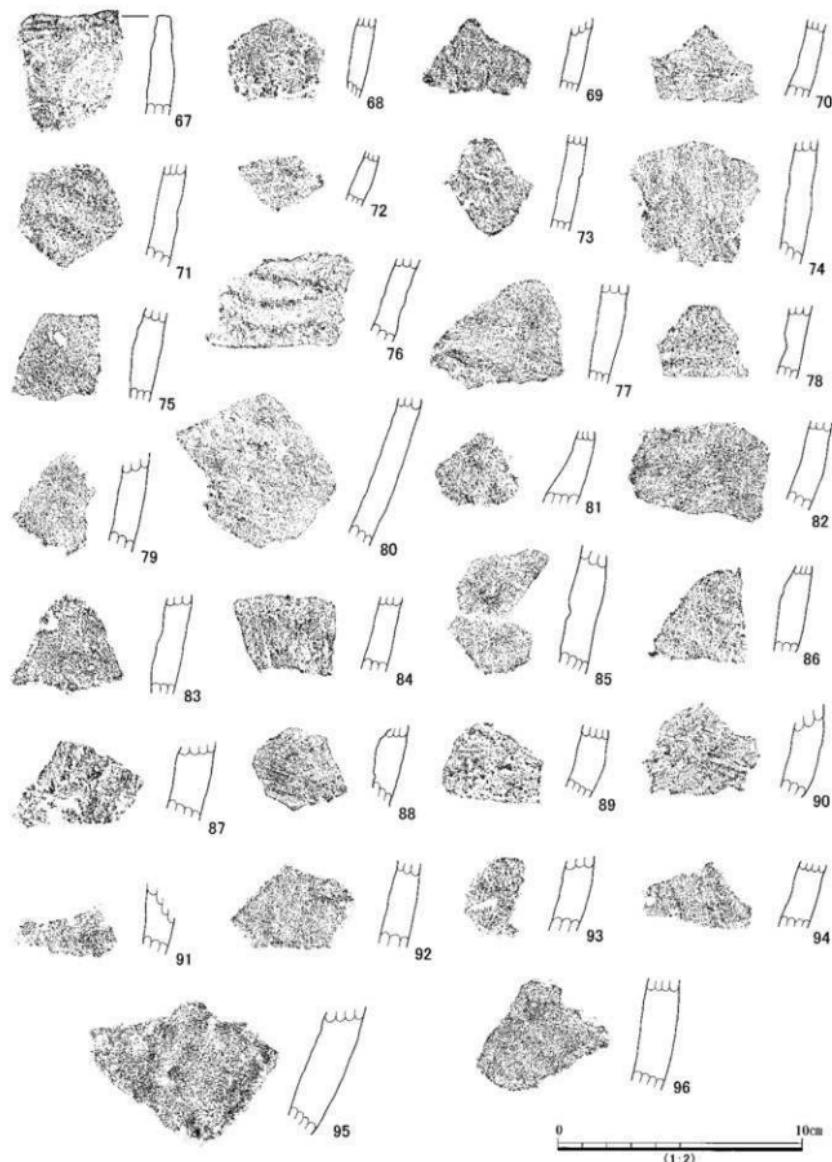
第27図 V区第1・2号集石土坑平・断面図



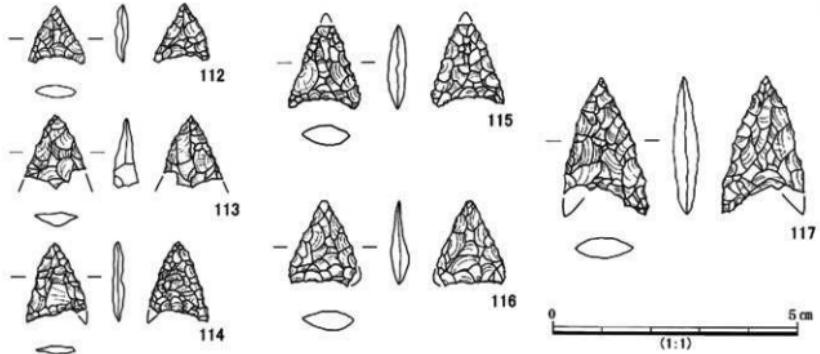
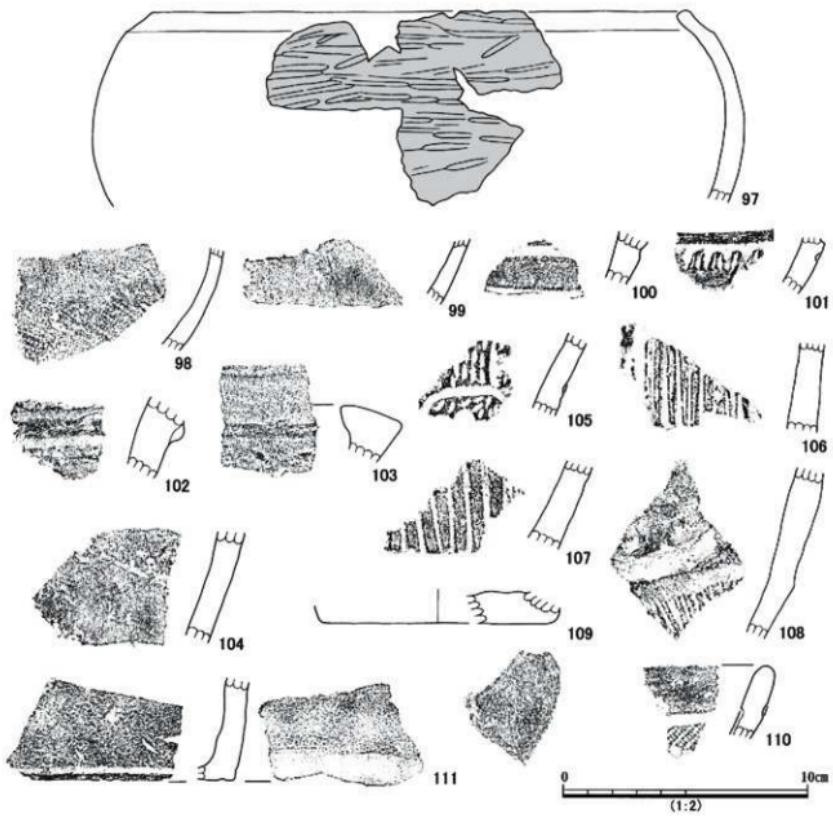
第28図 V区出土土器実測図（1）



第29図 V区出土土器実測図（2）



第30図 V区出土土器実測図（3）



第31図 V区出土土器実測図 (4)・石器実測図 (スクリーントーンは赤彩を表す)

付録 1 御坂中丸遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

株式会社 加速器分析研究所

1 測定対象試料

御坂中丸遺跡は、山梨県笛吹市御坂町上黒駒字中丸（北緯35° 36' 13"、東經138° 42' 42"）に所在し、御坂山地から流れ出る金川右岸の達沢山南西山麓に当たる標高591m前後の緩斜面上に立地する。測定対象試料は、V区1号集石土坑出土炭化材（No.1 : IAAA-102972）1点である（表1）。この遺構は層位関係から縄文時代早期に属すると考えられている。

2 測定の意義

山梨県内では少ない縄文時代早期と見られる遺構と、周辺から出土している遺物の年代との整合性を確認する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

3 MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい (¹⁴Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$ 補正を行い、下桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

V区1号集石土坑出土炭化材の¹⁴C年代は 4830 ± 30 yrBP、历年較正年代 (1σ) は $3654 \sim 3537$ cal BCの間に2つの範囲で示され、縄文時代前期後葉頃に相当する年代値である。層位から考えられた縄文時代早期よりも新しい値となっている。

試料の炭素含有率は約70%の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{14}\text{C}$ (%)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正あり	
					(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-102972	No.1	V区1号集石土坑 埋土1	炭化材	AAA	-26.03 ± 0.66	$4,830 \pm 30$	54.81 ± 0.21

[#4146]

表2

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 補正なし		历年較正用 (yrBP)	1 σ 历年年代範囲	2 σ 历年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-102972	$4,850 \pm 30$	54.70 ± 0.19	$4,829 \pm 30$	3654calBC - 3632calBC (38.0%) 3561calBC - 3537calBC (30.2%)	3694calBC - 3682calBC (2.0%) 3664calBC - 3626calBC (44.2%) 3596calBC - 3526calBC (49.2%)

[参考値]

文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data. *Radiocarbon* 19 (3), 355-363
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 51 (4), 1111-1150

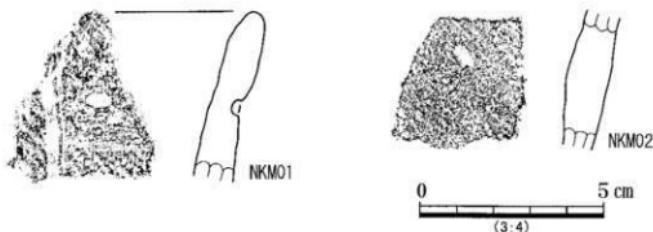
なお、炭化材の樹種はクリ（ブナ科クリ属）に同定されているが、紙面の都合から樹種同定の分析方法および考察については、ここでは割愛させていただいた。
 (小林健二)

付録2 御坂中丸遺跡の植物圧痕の同定

山梨県立博物館 中山 誠二

1 分析資料

今回分析を行った資料は、山梨県笛吹市御坂中丸遺跡から出土した縄文土器2点である（第1図）。これらの土器は、いずれもM区1号集石土坑周辺から出土したもので、押型文系土器、条痕文系土器、野鳥式に併行する古屋敷遺跡第IV群（富士吉田市）などが主体であることから、縄文時代早期後半に位置づけられている。



第1図 中丸遺跡出土植物圧痕土器

2 分析手法

本調査では、縄文土器の表面に残された圧痕の凹部にシリコーン樹脂を流し込んで型取りし、そのレプリカを走査電子顕微鏡(SEM)で観察する「レプリカ・セム法」と呼ばれる手法を用いる。

作業は、①圧痕をもつ土器試料の選定、②土器の洗浄、③資料化のため写真撮影、④圧痕部分の実体顕微鏡での観察、⑤圧痕部分に離型剤を塗布し、シリコーン樹脂の初期充填、⑥走査電子顕微鏡用の試料台に増粘剤を加えたシリコーンを載せ、初期充填を行った圧痕部分にかぶせ転写、⑦これを乾燥させ、圧痕レプリカを土器から離脱、⑧走査電子顕微鏡(ニコン製Quanta600)を用いて転写したレプリカ試料の表面観察、⑨現生試料との比較による植物の同定という手順で実施した。

なお、離型剤にはアクリル樹脂(パラロイドB-72)をアセトンで薄めた5%溶液を用い、印象剤には東芝シリコーンTSE350を使用した。

3 分析結果

(1) NKM01(第2図)

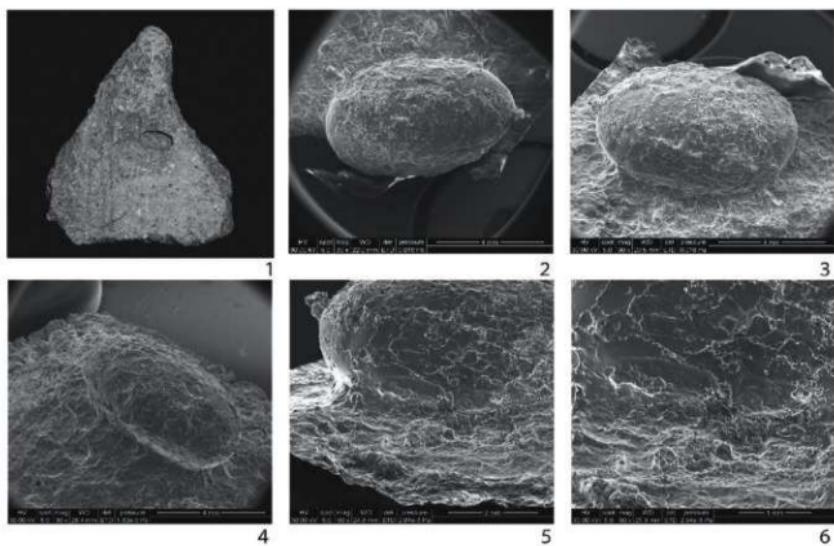
本試料は、長さ7.6mm、幅4.8mm、厚さ3.4mmの扁平楕円形の植物種子圧痕である。種子のはば中央部分に長さ2.9mm、幅0.7mmの長楕円形の溝に囲まれた溝が確認される(第2図5・6)。溝は全体の3分の2程度が残存し、溝中央部には部分的ではあるが溝が長軸方向に認められ、露出型の溝を持つマメであることがわかる。全体の特徴や溝の形状からダイズ属*Genus Glycine*であることは疑いないが、大きさの点から野生のツルマメ*Glycine soja*であると判断した。

(2) NKM02

長さ7.25mm、幅4.3mmの圧痕であるが、植物以外の圧痕と考えられ、原型は不明である。

4 小結

縄文時代のダイズ属は、レプリカ法の圧痕研究の進展によって近年その存在が注目され、縄文時代中期中葉以降



NKM01

第2図 中丸遺跡のダイズ属圧痕

1：土器写真 2～6：圧痕SEM画像

には野生種よりも明らかに大型化した栽培種と考えられる種実が増加し、ダイズが栽培化されている事実が明らかになってきている（中山2009a）。しかし、ダイズ属の利用の開始については、長野県山の神遺跡（縄文時代早期中葉：中沢2009）と山梨県天神遺跡（縄文時代前期後葉：中山他2009 b）の事例に限定され、国内においては極めて発見例が少ない。

今回、中丸遺跡から出土した縄文土器早期の圧痕は、両遺跡の中間に位置する時期に比定され、中部高地において野生フルマメの利用の開始期と継続性を知る上で極めて貴重な情報を提示したといえる。

引用文献

- 中沢道彦 2009 「縄文農耕論をめぐって－栽培種植物種子の検証を中心に－」『弥生時代の考古学5 食料獲得と生産』 pp.228-246 同成社
- 中山誠二 2009a 「縄文時代のダイズ属の利用と栽培に関する植物考古学的研究」『古代文化』 61-3 pp.40-59 古代学協会
- 中山誠二・長沢宏昌・保坂康夫・野代幸和 2009 b 「レプリカ・セム法による圧痕土器の分析3 -山梨県天神遺跡、酒呑場遺跡-」『山梨県立博物館研究紀要』 3 pp.1-22 山梨県立博物館

写 真 図 版



遺跡遠望（矢印が調査対象地）



調査地より大柄山を望む



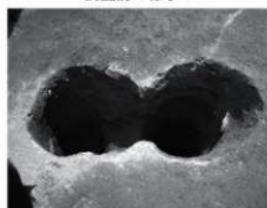
調査前の様子 1



調査前の様子 2



調査前の様子 3



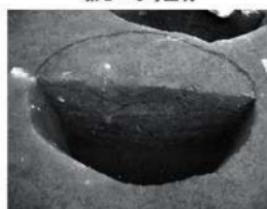
第2・3号土坑



第4号土坑とピット



第5号土坑セクション



第5号土坑セクション



第5・6号土坑



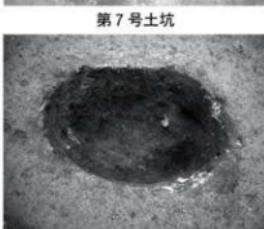
第7号土坑



第9号土坑セクション



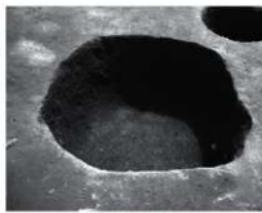
第9・11号土坑



第12号土坑



第13号土坑セクション



第13号土坑



第14号土坑



第15・17号土坑



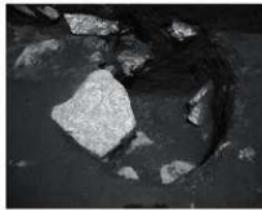
第16号土坑



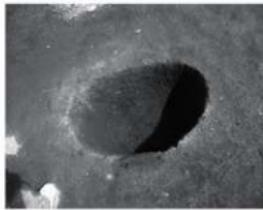
第18・19号土坑



第20・21号土坑



第22号土坑



第23号土坑



第24号土坑



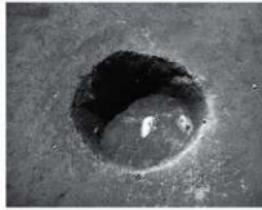
第25号土坑



第26号土坑



第27号土坑



第28号土坑



第29号土坑



第30号土坑



第31号土坑



第32～34号土坑



第35・36号土坑



第37号土坑



第38号土坑



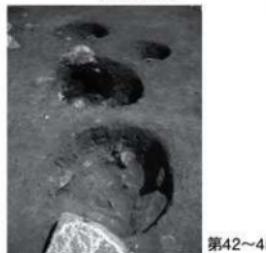
第39号土坑



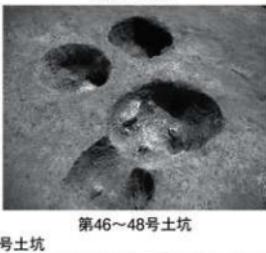
第40号土坑



第41号土坑



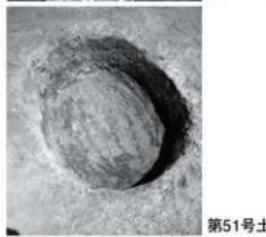
第42～45号土坑



第46～48号土坑



第49・50号土坑とピット



第51号土坑



第52・54号土坑



第53号土坑



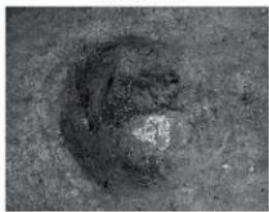
第55号土坑



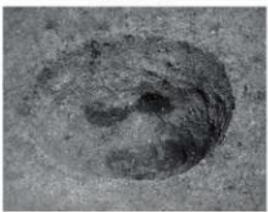
第56号土坑



第57号土坑



第58号土坑



第59号土坑



第60号土坑



第61号土坑



第62・63号土坑



第64号土坑



第65号土坑



第66～68号土坑



第69号土坑



第70号土坑



第71号土坑



調査風景



第Ⅰ区完掘



第Ⅱ区完掘



第Ⅲ区完掘



第3・4・6・7号土坑出土遺物



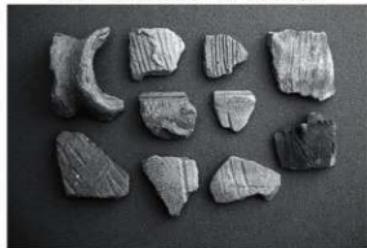
第9～70号土坑出土遺物



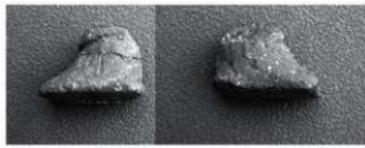
遺構外出土遺物No25～38（縄文早期）



遺構外出土遺物No39～51



遺構外出土遺物No52～61



遺構外出土土偶



遺構外出土石器No 1～4



遺構外出土
石器No 5



遺構外出土遺物 煙管



V区遠景（西から）



V区調査前



V区表土剥ぎ



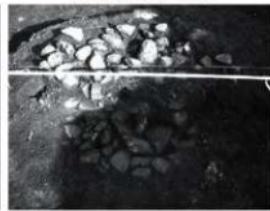
V区西側の調査風景



V区西側近景



V区1号集石土坑確認状況



V区1号集石土坑断面の状況



V区1号集石土坑底部の状況



V区1号集石土坑内の炭化材



V区1号集石土坑完掘状況



V区2号集石土坑と層位



V区2号集石土坑確認状況



V区2号集石土坑完掘状況



V区谷部調査風景



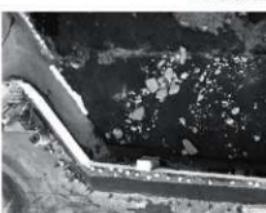
V区谷部調査風景



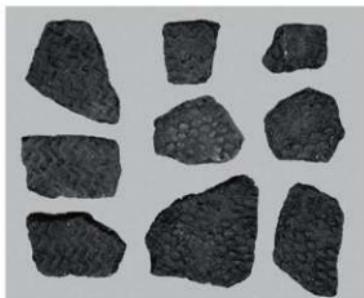
V区東側谷部（北から）



V区縄文土器出土状況



V区全景



V区出土縄文早期土器（押型文）



V区出土縄文早期土器（条痕文系）



(鶴ヶ島台式土器)



(植物压痕土器)



V区出土縄文早期土器（古屋敷第IV群土器）



V区出土縄文前期土器



V区出土縄文時代石簇

報告書抄録

ふりがな	みさかなかまるいせき							
書名	御坂中丸遺跡							
副題	山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第278集							
著者名	吉岡弘樹・皆川賢司・小林健二・小林万里子・中山誠二							
発行者	山梨県教育委員会、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL 055-266-3016							
発行年月日	2011年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
御坂中丸遺跡 (第1次)	市町村	遺跡番号						
みさかなかまるいせき 御坂中丸遺跡 (第1次)	山梨県笛吹市 御坂町上黒駒 ちなん 地内	19201	御坂074	35° 36° 14°	138° 42° 41°	20090610 ~ 20090907	2,000	山梨リニア実験線建設
みさかなかまるいせき 御坂中丸遺跡 (第2次)	山梨県笛吹市 御坂町上黒駒 ちなん 地内	19201	御坂074	35° 36° 13°	138° 42° 42°	20101201 ~ 20101227	350	山梨リニア実験線建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
御坂中丸遺跡	集落跡	縄文時代 早期～中期	集石遺構・土坑・ ピット	縄文土器・石器	縄文時代早期後葉の土器片がまとまって出土。植物圧痕（ダイズ属）も確認された。			
要約	本遺跡の調査は山梨リニア実験線建設に伴い実施された。遺跡は御坂山塊から流れ出る金川右岸の緩斜面上に立地する。縄文時代中期を中心とする遺物包含層や集石遺構、土坑、ピットなどが多數検出された。遺物には縄文時代早期の在地の土器片（富士吉田市古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器）が多く含まれ、甲府盆地と郡内地域との交流をうかがわせる。							

2011年3月18日 印刷

2011年3月25日 発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第278集

御坂中丸遺跡

編集 山梨県埋蔵文化財センター
甲府市下曾根町923
発行 山梨県教育委員会
独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構
印刷 株式会社ヨネヤ

